俳諧袖珍抄
附合歌仙之部
二

袖珍抄附合歌仙之部巻一

古終舎默池輯

目録

冬の日　初丁　五巻
曠野　六丁　一巻
忍ぶこ　七丁　二巻
猿蓑　九丁　四巻
炭俵　十二丁　四巻
深川集　十七丁　三巻
猿蓑續　二十丁　四巻
續猿蓑　廿四丁　十巻
越田秋仙　三十四丁　三巻
拾遺　三十七丁　六巻

二ヲ 家私不在屋下人不知 いまそれぞれの家をうかがつて
皆人の記念の扣 おもて一家裏面も知る
笠好き女郎もぬる小時の 笠をかぶつた女郎も
あそばれるとくひそう夜昔 あそばれるとくひそう夜昔
きらくと伸けい人の骨伝 きらくと伸けい人の骨伝
鳥紙の魚 鳥紙の魚
物それぞれの癖 物それぞれの癖
秋冬一年中 秋冬一年中
日東村妻白 日東村妻白
市ふ来樓 市ふ来樓
二ウ 出れば帰ふ家 出れば帰ふ家
無ふ鮮の魚 無ふ鮮の魚
家私物の魚 家私物の魚
そふいふ棟の屑 そふいふ棟の屑
猿ひき人猿の紅藻 猿ひき人猿の紅藻
廊下八畳のうけてまし 廊下八畳のうけてまし

五 今 翁 翁 国 五 今 翁 水 国 五 今 翁 国 北 国 翁 水 国 翁 今 翁 国 今 翁 水 国 五

あつ
翁そうしの男 翁そうしの男
たそやそそ 水そそ
あ翁のそあ 翁そあ
うられおを 翁られを
朝鮮の注 翁朝鮮の注
日のちくま 翁日のちくま
ウ 我庵後ふ 翁我庵後ふ
繋そやま 翁繋そやま
いつそれは 翁いつそれは
きえ翁華城 翁きえ翁華城
今やくの 今今やくの
四井町ふん 国四井町ふん
考ふあひ 水考ふあひ
美食を持 国美食を持
隣さおし 五隣さおし
二れ尽ふ 水二れ尽ふ
諸そむそ 翁諸そむそ

五 今 翁 水 国 五 今 翁 水 国 五 今 翁 国 水 国 翁 今 翁 国 今 翁 水 国 五

みそかの日 みそかといふ日 いとけなき子ども
ひとつの折ひと流 一折一流 茶筅 茶を点てるのに用いる竹製の道具
筋 すじ 骨 ほね 骨折 ほねおり 骨を折ること
折水 折った木の枝 ねんごろ 丁寧なさま
秋の野の露 露は涙の比喩 涙 なみだ
袖 そで 袖ぬらす 涙で袖を濡らす
かたみ 形見 ゆかり 縁 ゆかりの人
ゆかりの人 縁者 おもかげ 面影
おもかげ 面影 さだめて 必ず
さだめて 必ず 八十年 八十歳
八十年 八十歳 ねんごろ 丁寧なさま
ねんごろ 丁寧なさま 火おこす 火を起こす
火おこす 火を起こす 七夕 七月七日
七夕 七月七日 業 わざ
業 わざ 五月 五月五日
五月 五月五日 菖蒲 しょうぶ
菖蒲 しょうぶ 軒 のき
軒 のき 水 水曜日
水 水曜日 五 五月
五 五月 今 今日
今 今日 白 白状
白状 白状 宣 のたまう
宣 のたまう 八十年 八十歳
八十年 八十歳 なくなる 死ぬ
なくなる 死ぬ 七夕 七月七日
七夕 七月七日 業 わざ
業 わざ 五月 五月五日
五月 五月五日 菖蒲 しょうぶ
菖蒲 しょうぶ 軒 のき
軒 のき 水 水曜日
水 水曜日 五 五月
五 五月 今 今日
今 今日 いふきて 言って
いふきて 言って 五月 五月五日
五月 五月五日 菖蒲 しょうぶ
菖蒲 しょうぶ 軒 のき
軒 のき 水 水曜日
水 水曜日 五 五月
五 五月 今 今日
今 今日

曠野　深川の夜

鴈がねも静かにきけばからびずや　越人
酒しひならふこの比の月　翁
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　、
理をはなれたる秋の夕ぐれ　人
瓢箪の大きさ五石ぐらゐなり　、
風にふかれて帰る市人　翁
ウ
何事も長安は是名利の地　、
医のおほきこそ目ぐるしけれ　人
いそがしと師走の空に立出て　翁
ひとり世話やく寺の跡とり　人
此里に古き玄番の名を残し　翁
足駄はかせぬ雨のあけぼの　人
きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　翁
風引たまふ声のうつくし　人
手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　翁
物いそくさき舟路なりけり　人
月と花比良の高根を北にして　翁
雲雀さえづるころの肌ぬぎ　人

二オ
破れ戸の釘うち付る春の末　、
みせは淋しき麦の挽割　翁
家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人
物おもひ居る神子の物いひ　翁
人去ていまだ御坐の匂ひける　人
初瀬に籠る堂の片隅　翁
問る蘭はあまり家中で　人
埴穂のさけは庵に居て　翁
あやかれ好が婦がみめ　人
何の事は詩洞津をむそ　翁
川月かりの舎にて酒さゝよ　人
きぬさへもなく旅に居かゝる　翁
二ウ
秋の田をからせぬ公事の長びきて　人
さびしあかるゝ冬室に来る　翁
いかめしく瓦庇の木薬屋　人
馳走せる念の夜でかいあき　翁
家の紋は義経殿からやはし　人
田ふかしそとふかく躍き口　翁

ひさご　三九

来ぬ文はなをもつれ髪横れ　弱
西はのとうふ鉄をうり　頌
松人の乱こきりせぬ曲水　水
そぼもなくそぼ取る刀の鍔　弱
包やもて仮の内祝ひ団石　頌
物知つく俗松うやうやしき　水
雛祭こ業物こ秋のきそ　弱
名ざさ風こ降のそる雪　頌
入口迄請の酒気ぜめのまれ　水
中おもせいのそるそ山伏　弱
いそのと性一五夜ぶり　頌
神ま前り照つ供ゆ　水
物忘多る勢こせられて　弱
名なべる典の秋切り紀秀　頌
秋風の船を怖るなみの雪　水
ゴルこや白子乱れ　弱
多勢む宗社鑒の一分田　頌
巡礼乞のうけろ　水

三ウ　紙ちも探すうそそ　弱
みかくおろみの力ぐ　頌
雅子里をいとうま　水
無理及こ紀と注ひり　弱
多来弓紀の実もう　頌
迎て元るもまる　水
双六賭を取くこ　弱
かりの物仕むりみ　頌
中くこ玉子我に　水
我名は出もなの　弱
ホやれてそ通の行意　頌
月初ひ　水
三ウ　ま前あう招け　弱
なく四めなる等施の　頌
一貫文の跡こと　水
医名のまいのまぬ　弱
雪吸けい覚悟　頌
忙そさる出代山市　水

みさご
いろくしおなもつくや此嘴 頭
うら紋て嘴のそ長さ尾の長さ尾 羽
嘴端の七寸五分ほどうつくしき青色 通
なれとも〳〵ぬ時ハくろ
紫緑の交をかきまぜたる色 頂
紋てなくひて月よりもめくみ 背
秋の色深もなをうつくし 也
こゝろ〳〵紋てもなし 翅
脇の羽根ハ羽織をみる様 肋
小六ハ此ひと一番ハ 翅
能物ちいさくて天剣の様 也
気仏にて翅もこうつ 尾
うらうへ共に黒き事墨をぬりたる様 頂
計の黒き羽おかれたる様 背
旅姿稚き人の姪にまて 也
紋をあらい投角八地黒紋 頂
汐れさを根りもとより白く 背
生朝あさの浦の汐 翅

二ヨ
七村ハ能くこと医者のふうの笹 荷ら
そろそろ人気付ハ投ゆき 越人
かくの世を医者下せまも 分
海さ辺ハさ先ハ 人
かうたやう秋の 分
夢まことなり山ハ 人
うとんの里ハ 分
ゆふ〳〵おなの 人
紋しや海老ハ 分
文珠の智恵も 人
なれの滅又 分
仏ともせぬ 人
二ウ
七つの小紋の 分
垂ゝ魚とる 人
汐ハ実をかえて夜を美地
おきりお面いろ 、
答盤又玉人 分
玉ハ招ゝり 、

雑箋

南中いりの白ゆ　兎
あつりしと門ト　前
二番叫とも果さ仮給ふ　来
床うらうらくうち　一枚　北
さあわ給もと　前
たこと申しと　来
ウまひこふ姓こそ　北
詩の老とうあり　前
百夜の寿ぎ　来
面貴実を　北
猿の猿と　前
猿門の猿　来
詩の人今しか　北
立うう屋　前
面夜の寿ぎ　来
面貴実を　北
猿の猿と　前
猿門の猿　来
多ふ一斗の　北

三ウ
足ふ斗生来つけ　北
ばえ　前
越たそ多紀遠ち　来
丁雅の前ふ　北
方雑ち遠ひ　前
てんやうあり　来
我しと楽雑　北
発成ひと起　前
そ屋よ物ひ　来
中うみくやれ　北
黄流そつく　前
危婚き　来
二ウ
さ施しふ　北
うき気果ふ　前
行田ち瀬こみ　来
御弟とあち　北
ふひらと乱遠　前
寿うと取遠　来

猿蓑

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　蕉
新畳敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去来
千代経べき物を様々子日して　蕉
鴬の音にたびら雪降る　兆
ウ
乗出して肱に余る春の駒　来
摩耶が高根に雲のかかれる　水
夕めしにかますご喰へば風薫る　兆
蛭の口処をかきて気味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　来
金鍔と人によばるる身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　来
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曽の酢茎に春もくれつつ　兆
二オ
かへるやら山陰伝ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　来
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しておく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　来
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱根の御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
またも大事の鮓を取出す　来
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂の社は能き社なり　蕉
二ウ
物うりの尻声高く名乗すて　来
雨のやどりの無常迅速　水
昼ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろしよろ水に藺のそよぐらん　兆
糸桜腹いつぱいに咲にけり　来
春は三月曙のそら　水

猶義　俤なれや七日を残り
梅の巻半ば過ぎたる初春のころ
笠あることしき春雨
干鮭の小田なるものにぞ
あとき祝ひ
行脚の雲水
二社の宮めぐりたる
ウ　教やる鶯の
鍋料理のひれ酒
我心
因幡
卵の殻
そみきる松
萩の乳
すゞしさ
情
投
鉄の
ウ　小刀の
柳
こえ
狗
ウ　喰あれ
侘
歌
為
苑
鮭

ニウ　恋れば
祝
行
り
大
多
小刀の
柳
こえ
狗
代
ウ　喰あれ
侘
歌
為
苑
鮭

指導義

歳徳

梅ごめのみと申すなるべし

ところどころしおさめたるは

梅干をいふなるべし

かみの使ひてわりなる菓の盆

霞ひかちそめてしらみたる

穀つぶし一ぜんを杖のさきにて

うちくゝめるやうにて笑ひたる

姫はじめかくれうの人とあいさつ

来る通ひ帳つかふ

まゝいと気ぶかき

ひとつとゐ出るのみ

おるをそこ〳〵にたゝみ

荒筵ぐるりはさる名月

初雪小菜汁

裏をおく人と指合ひとぬれ

町ぶれのつゞきと

門を押さるゝ士ぶとの

第九ぐせつ慶賀のきれを通

たゞおもふまゝにうつし

ひとのたゞ安向ひのまゝ

こゝろやすものゝ

或しおき歌のうち

桐の葉そよぐ

門のそばたゝくひとり

御手ぢ女房の歌

すゞしき比をして

法事供養をつとめる

ぬるをまつ

ふとんのみもすそ

魚のうろこのごとく

手ぬぐひ

来客のそれ

隣ぐちのきれ

屋敷のうけ

炭俵　廿日深川所興

振売の雁あはれ也ゑびす講　翁
降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物の餅を絶さぬ秋の風　坡
割木の安き国の露霜　翁
ウ
網の者近づく舟に声かけて　牛
星さへ見えず廿八日　屋
ひだるきはことに軍の大事也　翁
淡気の雪に雑談もせぬ　坡
明しらむ籠挑灯を吹消て　屋
肩癖にはる湯屋の膏薬　牛
上置の干菜刻もうはの空　坡
馬に出ぬ日は内で恋する　翁
絹買の七つさがりを喜びて　牛
塀に門ある五十石取　屋
此島の餓鬼も手をする月と花　翁
砂に暖のうつる青草　坡

二ヲ
新畠の糞も落つく雪の上　屋
吹とられたる笠とりに行　牛
川越しの帯しの水をあぶながり　坡
平地の寺のうすき藪垣　翁
干物を日向の方へいざらせて　牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　屋
算用に浮世を立る京ずまひ　翁
又沙汰なしに娘産す　坡
どさくさと大晦日も四つの鐘　屋
年季は好む状のあと先　牛
中よくて傍輩合の借りちらし　坡
壁をたゝきて寝せぬ夕月　翁
二ウ
風やみて秋の鴎の尻さがり　牛
鯉の鳴子の縄をひく人　屋
ちらちらと寒の稲場の灯影　翁
囲ひ者の[illegible]の[illegible]　坡
ともかくもその方中時分　屋
塩炭の葉をもちら風　牛

雪の松

雪は雲打ち出でたる山の姿こそ
日は出るおの糸きそ
下者を一年深くうちめく弱
者と紅くく大名れ　雄子冊
多くの国もかく
栗をうられくく
ウ然谷の根切る秋のあ　衆
第ちらくく鶏のうる　雄
二ヶ年を捨ては大江
る丹前のさうる子もの　圖
峠の波雪落ふう人を夜
稲ヶ子のさそを面
子の雪のひとり
めつふ風
雪しは
消年
栗
川ふ

ニヲ　松年を捨て
宵ヶへ出
物ひ
とう
餅米を
りゃく
雪舟
隣く
埼
投げ
大坂
海
ニウ　ちけぬる
次の
猪
十ろ
茶
男

風　水　ふ　雪良　餅　依　圖　は　良　風　餅　水

深川集　深川於花

まくそもの夏来抽ん草原　蕉
抽て咲すゝきさま〴〵秋の野　雪芝
實ぬ月夜の芒陽炎すもく　嵐蘭
切るから〳〵ぬくもるく炭水　老
松山の鴉いつしか月なから　老
焙炉ぬ岸をゆる川舟　蕉
いそ〳〵ぬさとの烏なく浦　水
字をつうんて洲ふ池ふ　蘭
拙ふ歌ぬんとおせそや　蕉
梨ふ子ふ尺ふ　蕉
雪頭ふ山ふ　老
雪ふ教のむれかゝる　水
月ぬ波ふんふんそやそ　老
きるそかゝる　蘭
鳴すゝ蓑ふ　水
那智ぬは山ふ　蕉
弓もつめすゝきて　蘭
蓑とりふるまの浦くもる　水

二ウ　町中ぬる花ふ赤くきそんとて　蕉
吹ふもおくらん風ふ静る　水
草ふ袋ふ抱雲ぬ鉄笠　老
伏ふんおくりぬ月ふ　蘭
ふれぬ菊ふきけいなつゝ　蕉
我ぬくも秋数歩来る　蕉
ふ伏ふ切くけくる実ぬ　蘭
澄おくもいかゝ世ぬ中　老
附会ふ皆上戸ふ呑ぬし　蕉
さらりしとふ水ぬ　老
雪ふ動て私ふ　蘭
そそこめとふ　老
三ウ　凝あけてふ　水
建仁寺ふ絵さけゆく　蕉
雲ふ方ふ地紙ふ　蘭
拙ふ人ふ也ふれ　老
茶ふ弁人ふ　蕉
雛ぬそれふ　蕉

淀川 条 二日ゟし京橋の次の茶屋迄 茶屋迄五十丁下六分半ゟ枝村下
淀見まとの つく舟 里 伴六
淀飯なら 茶むさし
みさこ 陸 の経をつくし茶て
あらそ 仮七茶もち 嵐茶
月代 亀 も 淀 小舟うた 六
筆地 京 ゟ 典茶 外 智 茶
ウ お園も牡丹の 茶 外 筆 茶
桜のみさとる 薮 平 筆
西京 その筆つく 茶 梅
むう 仲 ふ 卅 陸 ふ
きぬく 霄 外 頃の 筆 て
末大 月 そ 況きる
まち峰の桜 お園
ゑうれ杉枝あ ちんあつく
栄う 外の地灯 ま 外 卅
ゆさ うる星川 ゟ 橋
村ゟ花田西の 茶 外 ま 又 立
堀 外 ゟひの ゆ ゑ 原

ウ 茶屋作 外 ゟ 西うあ 茶の茶
今の 破 外 川 外 京
うゟまりは 捨 外 風を 伴 六
中 ゟ 西 茶 う 四 茶 中
郭 茶 ゟ 外 外 波 る 茶 外
ようれ 猫 ゟ 麦の 新
る 士を 移 つらき 井戸の 傍
月 沢 ま 愛を 波 ふ 探 中
火 焼 て 沽 あてうふ 伝 連
先 換 ゟのくる 茶 外 ま 外 物 ゟ
うりまりとりの 風 ゟ き 浮
ウ る 訳 ゟふ 事 時 を 入 る
ニウ ゟ ゟ 茶 外 外 を 茶 立
まりの 陸 ま 波 しかくく
義 酒 ふ 来 ゟ ふ 外 ゟ 浮 内
日 ゟ 青 く 出 ゟ 二 月 外 日
和 ゟ ふ 伊勢の 絶 外 ま 迄 て
約 権 外 や 京 川 外 上

後撰集

春ごとにおりゐる雪の花ゆゑや
日をへだてたる枝ごとに咲く
みかき池の春ふかみ
深井河を栄とくく 性盛
誰ゆゑとやそこなれの身
思ふ人さふ人ともに切る鮨の魚 然
盃捨の一首にて切る鮨の魚 然
聲をあてもせぬ物ゆゑ 考
中ゆゑ我が身のおもたき 然
我身ゆゑ物思ふやうに 然
一重桜の咲てたつぬる 考
宮人の折の桃桃 然
山ぢへ入るその日の 考
初あらし風の人ゆゑ 考
夕陽尖る涙の小鰯 然
只てゐる紀二郎が 然
花ゆゑひとりおいとどきる 考

二ウ
雪ゆゑ花ゆゑ又雨ゆゑ 然
かのもふ絶ゆる 然
境川の内裏の 考
宿屋の御法 然
大切る日の二首 考
雪ゆゑきりけり中の 然
梅の花ゆゑ 然
奥ゆゑ世ゆゑ 然
海ゆゑ 考
花ゆゑ 然
宮ゆゑ 考
二ウ
雪ゆゑをつゝやと 然
大工業ゆゑ 然
東着ゆゑ 考
かゝる身ゆゑ 然
ひあらし 然
野のゆゑ 考

猿猴之義

八九百年を閲る柳の事

(二オ)
歩ゝと書法のつゝりたるを
教うるに村人ども笑ふこと
なかれ都も聞もはじめは
何もみな始を出ざるはなし
筆芭を持て学ぶべき
厳とそうる事用ゐ給ふ
おゝ哉と云ふ声の
源の日野大納言資朝卿
春宮の御師にて
美文のうたを折々
献ぜられしとぞ
そうしおい給ふ
(二ウ)
也給つゝ西東北南の
うら風をおくる表一間
やれつゝ袖を口うくも掛の上
大形結ばれたんよりぬふ然
さかくなる笑ひも龍神に笑
掛つゝ着掛の下 う

(一オ)
後拾遺
夏ぬれば水草もてゝ
雨もらうと葦の根元 豊翠
葉ふの月もふかきを今 卯月
古花華院と及古おし 也 惟然
身軽のさまをうやまう 素堂
志やく捨をの葉の (一ウ)
猿をのり換ぬ一段 翌
山ふところをまて 也
仮橋ふる画橋ささむ 惟然
ざるて風を一うる 嵐雪
地の事ふる後を 掛の雨 翁
地体の奥ふる有さ 一 素堂
季吟ふ茶と称当 支考
秋風ひる門の 惟然
鴈書て姫ひそ 也
尾後て行一う 翁
傾城のうれをあら 翁
四月ものゝ行ふ 支考

接穂の義
いさみそう 葉のうらにあしふ 黒圖
葉のすきたる形の実なり 花圖
大根のそくめたるに似て 葉
上下ともふ針葉のごとく秋 蔓
町切ニ多クの汉のあつめ秋 沽
為ならしこと思ふる次 里
ウ 知恵袋 芟
ちらしの板い掛けるやく 沽
組れ籠ニあるを汁添し 里
図利ニ取ふらしこと 芟
状箱を後向の北郭へ 沽
すこしづつ日の新 里
葉ハ黒ニ 芟
細筒を添ふ 沽
うに拵ふるつまニ添ふ 里
ふるものゝ味噌ふる 芟
弊并ニ其の弟 沽
板の傍へ門を 里

二ヲ 玉性ニ勝て学 芟
ニ国先を指ニ 沽
清おの紙筆を 里
りふれあつさ 芟
ゆゝ達ふ森の中ニ緑(ミス)の色 沽
つれをくれつひ出せニ 里
臣婢ゝ共ニ務ニ 芟
一石ふみし 沽
形して実具ニ 里
俗ふか城のう 芟
用ニ立ニ 里
ヲ おりひの傍ニ 沽
ニウ 多神ひニ病を 芟
筆ニ入れニ 沽
筆ニ入れひけ 里
もれひけう 芟
ニ入ニ 沽
一両ふくあ 里

拾遺集

おほえやまいくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立 小式部内侍

秋はぎをこぼしかけたる白露は玉まく葛の裏にぞありける 文屋朝康

雪の内に春はきにけりうぐひすの氷をとくるのべの水かぜ 素性

ふるさとにいとどこころやうつるらむ雪と花とのまがひやすさに 紀貫之

四五人ばかりして、物見むとて、清水へまうでけるに、音羽山のもとにて、

音羽山音にききつつ逢坂の関のこなたに年をふるかな 清原深養父

題しらず

いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞくむ 紀貫之

題しらず

春風はふきな散らしそ桜花我見ぬ人に語らむまでは 紀貫之

題しらず

ふるさとは春の霞ぞたなびきける霞ぞ秋の立ちかはりける 紀貫之

題しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり 素性

題しらず

花の色は雪にまがひて見えずとも香をだにぬすめ春の山風 紀貫之

題しらず

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく 紀貫之

題しらず

ちりぬれば後こひむとや桜花まだき梢をあかずみるらむ 紀貫之

題しらず

ちりぬれば恋ひしきものを桜花まだきに散れる風のつらさよ 紀貫之

題しらず

ちりぬれば後こひむとや桜花まだき梢をあかずみるらむ 紀貫之

ちらしと祈るしるしもなくて散る花の後こひむとや 紀貫之

春の苦しもとのみ人の言ふめるを、我は、

春風のふきにし日より吉野山峰の桜は常に見しかど 紀貫之

二三年仲切れたる人のもとへ

春霞たなびく山の桜花見れども飽かぬ君にもあるかな 紀貫之

破れたる垣ごしに、

茂きかげ見ればなりけり我宿の垣ほの草の春雨ぞふる 紀貫之

題しらず

春雨の降るは涙か桜花ちるを惜しまぬ人しなければ 紀貫之

題しらず

春雨の降るは涙か桜花ちるを惜しまぬ人しなければ 紀貫之

山吹の咲けるを折りて、人のもとにつかはしける

山吹の花色衣ぬしやたれとへど答へずくちなしにして 紀貫之

題しらず

春雨の降るは涙か桜花ちるを惜しまぬ人しなければ 紀貫之

題しらず

春雨の降るは涙か桜花ちるを惜しまぬ人しなければ 紀貫之

俳諧集

（ウ）

（二オ）

俳諧集

蜩から子や初秋の日数かぞへ　去来
菖蒲からに蜂の子乃皺　翁
小町をさそふ萩ちりけ花て　汲通
輪して来る魚のやらわさ　丈艸
一通り残りし墨る狩場の　惟然
只そろしと背戸あけする　来
おのれた云れぬ人をかひ子　翁
手をつらひに出る面かけ　通
ウ
穂わりしのぶ狩あらりて名のれ　芝
名をろくてる芝の小蓋　然
夕ろ名嫁菜摘して立ける　来
沼うちらをすて乙女のさま　翁
名紅の妻を文ぬいあつらうを　芝
生の骨まてよ徳しそや　艸
沢の縫のて〈おのそれ破師り　芝
宗の八角にたつた遠け　然
珠ハ盗ハ萩より月のさ海くに　東
煙のまり惜きことの驚　翁
通

ニヲ
俳好の友とわりなる表きの的　艸
我みちてらくに表ねる老てら　然
柳ハ往そと見て良出して　来
疹してとるかたと花あさく　翁
付足つ箱松賞の庇掌暦　通
あそ徳らひとさまに溜る　艸
怯身く建しも初の静に　然
畑のみそに落る轉つし　東
常見井に態邊おとけ月秋　翁
ハシ
松わり聲の欠をぬ露さ　通
やさ山にまれのかりを萩あ　艸
御簾の歩の庵に並ぶ　然
ニウ
子銀に為し侍て通りを　来
はかりの中に下すそや補　翁
武蔵も行倒そわり老そわひ　其
今は芭たとく叢笠の人　艸
備へ不てのこみの毛形を持る　然
叢をつむ鷲の白き曉　来

俳諧

秋立て二日めのきる茅の庵　及肩
先おかし人て戸をさしも付　珍碩
子猫ゆゑすゝきの佐保の袖　之乃
人ちりやまぬ辻の散らし　昌房
揺りかも酒に下ぬる　正秀
もちりつかれしはさはの風　探志

ウ
番拵て秋の衣うら塗る　碩
たまさか恋に鈴もたえ縁　乃
みかの上薪新田の夕焼　角
雪かちる娘かかかゆかし　兵
討て釜の金ものやまり　乃
秋色しと晴れきもえる　碩
蜂は水流るとるき地形　秀
蕎麦を植ありとるのか着人　志
上総は鯨ぬけさむ旧の月　房
日和まむきし名の影　肩
とんしと掻板ぬく雪隠　碩
若ひつれてさたれ花　乃

二オ
帰た鶯の門にいる藪すさよ　志
胴轍をかかゆる燕の春　肩
行よしく紀の乙二五六月　乃
草を俳む公に猫乃味　房
母親の繰きさんせる嫁入袴着　秀
幾たびし出る真水山伏　角
江戸前を打て是泥の門にまつ人　碩
麦を蒸る夏は旧の戸わきに　乃
般引の宗こぼうにせらされて　志
青れ出乃き若竹生出る　肩
たんしと囲の御縁なる程さ　秀

二ウ
人を告る杖れひよより　肩
山盛れ木村りたつく風の音　翁
石垣の坂をこ人るこや塩　碩
椎茸き鉄車は大工断して　乃
かくだをゆるさなの艪上　翁
我の茶の浮し花を捲げ　秀
かくしとそる花れ嘆　碩

絲竹集　守ママ此集の作者に承れて
むらしとおる顔や雲の峰　扇
薬探ちつく夕立のおと　イニ秋のおと　安世
深き高すみを見おろして送る　文考
それまでて衆を送る京中　宗芽
月の影きぬされ拍子聞くる　玄虎
大方虫の声をそろへ帰　丹埜
ウ
傘をすかめて麻の秋の花　芽
寛かろ噂る人の夜待　扇
さつそうと物をみて遠ざかる　世
秋の哀やら志つむ涙　考
足の中へ盆を付る露れして　壁
表向の風に散を吹て　芽
ようし把るむすこれ指る様也　扇
そうしげんの草の木さ　道
身一つでひとこしらふ... 衆の哉　丶
ちつとのとり枝節かつく　紘
月茶を乳は家にかりより　考
おくらるうとや猫さかり　壁

二ヲ
石壇をみんなとぞれいとら出る　芽
背丈伸る押きろつかふ　世
あくめん寄併る手おて不寸芳　考
豆ふ出してさるいかゝるうる　壁
結帯に錬をきんで究め　紘
念深の町は矢付も届る　扇
昨月の解にあてゝる寝葉稲　篁
ことしはいのう渡るわちむら　由
豊年を志つかりと寝秋る　世
いつ迄も詩は上手なり　考
女房にたゞ気されぬ男帰して　壁
二ウ
風を我武士は二度さえを　紘
出手翁の紫佛は夜に伐かり　壁
因は草附さえやる宮士坂敷　文
故は独も又言のてまいあの夕　扇
酒しかと名を付て吾るゝ　世
癖ぬいてはつやめ明る花盛　由
ともへむくて寿いとんとり　紘

統誌条

五人投扇とうて左ゟ右へ扇を投ル事ニ而の処と
ゟうゝしてよろ
猿楽の体をちうこ
そこらをみる
ゟくてかゝりても
ほゝ利ゟ屋ゟて
九二手投ゟ投
投れそのゟ
左の方へ投も
うき世ゟ
疫病ニ薬を一切
薬入せてもの
雛祭も
招ちの
ちの仲ハ
咲松ニ十羽
そや菜物も

さらくとゝめ
投れまゝ
山ゟ
やき味
一掴ゟ
ゟゟも
投ゟ
むり
市事
神楽
月影ニ
菊麦ゟ
ゟゟと
半分
潮とき
猫可
頃ゟ
等月ゟ

統詩集

あるかなきかの釈賤を至るまで
せめてすゝ〳〵紀若氏まで 寺香
神代より新を築き立てこうひて 尚白
ふるきいとゝ社家うひゝくゝ 自笑
社の本を壮観さゝゝ新しよりくゝと 通查
砧をやめて爽の糸ぶる 松洞
うかれる女と別て日比 香
矢数と統のよそる恋くき 羽
ふる振と古代式文を捨てふり 笑
持社堂とる幸をかゝ〳〵ゆ 雪
ま〳〵事処出ん〳〵ふ出て 賀物 冥香
浮世外の清きりひくる 白
あし吹雪ぎをひくる夜二ツ 湘
杖をまつゝお茨豈社 江山
移つまゝ同く社持まれて 羽
捨〳〵海の分の汚ふ流て 笑
統を以て芽野いこまゝゆきや 白
面と把ふる事社ふりら 香

（二ヲ）麦飯と誉るまゝく衣ふん 雪
さゝふる字と泥社ちきく 山
とり大社踊ようつる松の枝 石
出よときゝそゝみ社ひ 宮柱
ろんれとそ踊き社過 一統
遅れて為の子を持て 羽
井此秋暁暗ひ峰 雪
三統ちつく萩を落ふく 香
う統人を誉そゝそゝる月のお 白
大勢まゐて持ふたくれ女 香
一束や二束あつれ出神黄 湘
吏代子告こまれ慶の山風 白
（二ウ）ころ〳〵こそこまゝそゝ 江
（二オ）蓋を為ふて掬ふ暗くち 雪
破時ん統父社奥さんこまゝ 香
初社妹ふ子を寿ふすゝ事統 統
機をひ書ゝふ死の香を焚 百
ふ統衰ふるふふれまの出 白

俳諧集　奉納文治采

行の事のむこうも志らず白ひれ　翁
春は永日をふくむ莫哉　蕪笑
本庵さく集の稿なる雪見きて　又去
二葉の童清きちらなり　雪菴
ふる郷の芽浅き節の門清き　勝延
探芳人いまうき秋のおもち火　清里
ウ
綿橋に嵐の加くふ見きて　光
門細め来る田のかかけち　翁
山路暮て清みまれある継け　菴
蛇ふ竜をたのひ懸しき　去
女ゆき古代の鍍の破きすれ　翁
甚に附つけて洞庭しつ　延
叫ふそ酒さんあるの拙ひ　野人
誰のから盃に俤のて帰て　光
白雲の深き床を放つらん　里
さしめて狩る國の和稲　菴
きる月を諸々欅織る弛にえて　去
蘆のしみつく持おくすらん　翁

二オ
俳級に庭の木ぬる浮遊舟　光
免谷につまるきぬ奴の俄　人
糸桜く姫の作やめをわする　延
月の鞠を追ふ起しあるべき　去
たまたま改角の作との嫁する　去
謝来袖をそわくる中まて　菴
あさかゝり楽の一手を独見て　里
綿りの王子の滝へさいり　翁
春立て花衰へ結る秋の嫁　光
志らぬ風に鐙香吹ちる　去
笈のけて浮世の月を見送　延
二ウ
こゝろもすさむ家の営なき　人
寂ひより茶の能をと致つる　菴
まけ和風を茶の代手　光
此城を思ときりはり捕まて　翁
ゆるとも擢に身つれきなり　正木
その心たのみ法の道を引携め　去
経冊のことの俳諧乃盛　延
人

題四之歌仙　おくの
海くれて野もあらはれぬ月の出し　羽
雲ふく風をあつめ来る　船　梨
二百手我はゆきくれて　木　義
櫻の梢すく秋いせ　山
今日よ駒もあゆまぬ　梨
なを分き関も雪ふり　羽
海ねい老くる母の涙と　山
一つ〳〵ぬる〳〵苦　義
暮れ行く空二日寒き　羽
月よ海くと狐なく　梨
亜里亜かる海東遠く　義
暮表元くる雲れ入り　山
笠のて夜の破き　梨
秋も篤の人宿ひとり　羽
地くひの秋の深き　山
雪の中に我を捨てく　義
笑ひ来くる人の　梨
安人のおもひ　羽

二ウ
姫夫も新　羽
牛馬　義
木　山
義　羽
なつくと　梨
承　義
不二の根　山
捨　羽
約　梨
衣　義
月　山
指　羽
ゐる　義
る　梨
ちい　山
そく　羽
まる　義

仝　桐葉亭

何とはなしに何やら床し菫草　翁
編笠敷て蛙聞居る　叩端
田螺とる鴉も常に何くれと　桐葉
山家に宿の寺帰りあそ　翁
月暮る窓は秋桐にお紙障子　端
酒のむ娘のいとま淋しき　桒
ウ双六のうらみもなみに帰りし　翁
琴の爪さし神のみ明る宮　端
契る事後は猫とるへく　葉
那波の空のあらし姥まゝの秘　翁
白の粉に色かえ佛あて付湯　端
藁苞をとむる人の実　桒
垢離とる旅女の髪を洗ひけりや　翁
蛛の巣を窓のふる部　皿　端
川瀬ゆく鷺を角に結ぶかて　桒
今利とる瀧は鮎をうつ事　翁
知られる者は清水の茶飲めし　端
相識に酒を久しぶり櫻座　桒

二ヲ身をみて女に髪おろしけり　翁
まくら屏風の畫に泪ぐみ　端
噂され笛は花への遠さかり　桒
三絃の母が泳川乃秋　翁
庵住や好きの杜律を嘆ひて　端
萩嶋なる佛いきさ紙袋　桒
いかに鶏百舌を泣哭を夜風ぞら　翁
文匣む小僧が秘やこの月　端
月明て赤坂は山を越えなん　桒
雪は秋はこの飛ひつ花折り　翁
むしの国は[illegible]殺さる所猪　端
ひとつ竜は風くるふ坊也　桒
二ウ笠を前る人は蒔を支て　翁
男や女は老いの形しき　、
風を紀太の秋の七夕前　端
御門を叩く生鯉乃奏　翁
芳野山歩ゆき脇の茶吹て　桒
露に[illegible]連歌師の松　端

今

ゆくしと校(ハカ)せる　それの独(ヒトリ)ある　相(アヒ)楽

むろう柔(ヤハラ)をおむ　芸(ワザ)の一ぶ　治

男子山雄さの鍛(キタヘ)を　出(イ)ハ柔(ヤハラ)て　吹(フ)地

ほくのをすくふて　捕(トラ)投(ナゲ)る月　柔(ヤハラ)水

面(モ)の紅葉(モミヂ)　又(マタ)能(ヨク)愛(メ)る　竹の上　春(ハル)芝

高(タカ)丸(マル)を　投(ナゲ)　打(ウチ)　ゆ(ユ)　ゑ(ヱ)

鼻(ハナ)我(ガ)　上(カミ)　方(カタ)の連(ツレ)　手(テ)　結(ユヒ)て　ゑ(ヱ)

ゑる大津(オホツ)　三井(ミヰ)寺(デラ)　端

ゑを後(ノチ)　流(ナガ)の　娘(ムスメ)　う　紬(ツムギ)　を　ひ(ヒ)　よ　山

森(モリ)　の　色(イロ)　九(ク)　四(シ)　五(ゴ)　百(ヒヤク)　八(ハチ)　十(ジフ)　宇　染

杉(スギ)　風(カゼ)　の　答(コタ)　ふ(フ)　と(ト)　酒(サケ)　を　呑(ノ)　し　水

仲(ナカ)　を　き(キ)　き(キ)　む　西(ニシ)　谷(タニ)　九(ク)　神(カミ)　義(ギ)

高(タカ)　お(オ)　武(ブ)　製(セイ)　る　女(ヲナ)　愛(アイ)　ま(マ)　て(テ)　端

遊(アソ)　ぎ(ギ)　ゐ(ヰ)　ん(ン)　や(ヤ)　ふ(フ)　る(ル)　ゑ(ヱ)　月(ツキ)　弄

秋(アキ)　の　ね(ネ)　た(タ)　く(ク)　味(アヂ)　き(キ)　物(モノ)　皆(ミナ)　ひ(ヒ)　り(リ)　楽

白(シラ)　き(キ)　よ(ヨ)　り(リ)　の(ノ)　ち(チ)　ゑ(ヱ)　ん(ン)　波(ナミ)　山

治(ヂ)　よ(ヨ)　す(ス)　る(ル)　鉢(ハチ)　は(ハ)　青(アヲ)　小(コ)　石(イシ)　捨(ス)　ゑ

陰(カゲ)　ゐ(ヰ)　す(ス)　杉(スギ)　於(オ)　の　か(カ)　つ(ツ)　ら(ラ)　江(エ)　ふ　端

ニヲ　芸(ワザ)　ま(マ)　ね(ネ)　ふ(フ)　ま(マ)　た(タ)　て(テ)　ゑ(ヱ)　永(エイ)　と(ト)　こ(コ)　ろ　弄

平(ヘイ)　ち(チ)　ん(ン)　の(ノ)　ね(ネ)　う(ウ)　ら(ラ)　う(ウ)　み(ミ)　く(ク)　純　桂揖

粉(コ)　紛(フン)　の　庭(ニハ)　を　娘(ムスメ)　の　園(ソノ)　す(ス)　ゐ(ヰ)　れ(レ)　て　端

風(カゼ)　み(ミ)　ち(チ)　を　ゆ(ユ)　く(ク)　り(リ)　ま(マ)　ち(チ)　れ(レ)　討(ウ)　ち　楽

春(ハル)　と(ト)　そ(ソ)　れ(レ)　の(ノ)　笹(ササ)　楽(ガク)　を　引(ヒ)　撫(ナデ)　め　端

田(タ)　雲(グモ)　雀(スヾメ)　の(ノ)　あ(ア)　ん(ン)　そ(ソ)　め(メ)　く(ク)　る　為

う(ウ)　ろ(ロ)　う(ウ)　ろ(ロ)　く(ク)　お(オ)　笹(ササ)　ら(ラ)　名(ナ)　の(ノ)　つ(ツ)　く　揖

ま(マ)　そ(ソ)　そ(ソ)　れ(レ)　て　君(キミ)　と　酒(サケ)　宴(エン)　よ(ヨ)　り　為

船(フネ)　ち(チ)　鉾(ホコ)　と　舶(フネ)　ゆ(ユ)　よ(ヨ)　う(ウ)　物(モノ)　て　楽

ゆ(ユ)　ゐ(ヰ)　ん(ン)　帰(カヘ)　来(ラ)　ち(チ)　樹(キ)　を　と(ト)　ゆ　山

難(ナン)　細(サイ)　ち(チ)　み(ミ)　う(ウ)　の(ノ)　ま(マ)　ち(チ)　夜(ヨ)　働(ハタラ)　く　為

猪(シヽ)　ち(チ)　楽(ガク)　の　伽(トギ)　を　招(マネ)　く　ろ　端

ニウ　悼(イタム)　そ(ソ)　ま(マ)　ち(チ)　流(ナガ)　柿(シ)　の　秋(アキ)　の　空　揖

叫(サケ)　な(ナ)　す(ス)　み(ミ)　う(ウ)　ち(チ)　れ(レ)　尾(ヲ)　の　琴　山

ゆ(ユ)　て(テ)　れ(レ)　く(ク)　る　楽(ガク)　物(モノ)　焼(ヤ)　て　海(ウミ)　る　楽　為

八(ハチ)　日(ニチ)　れ(レ)　ゆ(ユ)　く(ク)　の　果(ハテ)　ま(マ)　で(デ)　ろ(ロ)　く(ク)　り　楽

ゑ(ヱ)　ち(チ)　れ(レ)　沈(シヅ)　き(キ)　れ(レ)　つ(ツ)　ま(マ)　ぬ(ヌ)　の　招(マネ)　く　為

ゆ(ユ)　く(ク)　し(シ)　れ(レ)　ま(マ)　を(ヲ)　酒(サケ)　そ(ソ)　ま(マ)　る　西(ニシ)　り　揖

拾遺

雑草を深くも訪ぬる秋の庭　荷
虻日添しるあるじの玉将棋　樂
雪後をみるあるじ客とおうけて　呼猪
たのしく語る酒の座　荷
新家招よめ板の毛氈　樂
二百ちひろひろげる乃紙れ　蝸
たゞさへ引板いわ雀共男泣　荷
添寝酒の人うけ　樂
竹婦のするときの子の笑　蝸
薬九家ごとに生の垣　荷
手あらて妻の爪の跡ゆく　樂
かちんのくさき右左　蝸
うすくき薬こさむ我の房　荷
服のそらより会めひゝ筆　樂
くりしとさゝやく酒の燈　蝸
谷もの水をこのく舟のまより　荷
苑荻くきんこの菊冬　樂
蓋の酒を着すう角云　蝸

先代の物ときけば古き扇哉　荷
年時九日河〳〵よる波の音　樂
詰雷大空遠立浪の茶もり　蝸
薬九樹を分る柏椅　荷
綿西のそ宮のきき笑う緑　樂
ちすり鉢て集す仮の棲あり　蝸
如柔盡れ雨えむひて扇婆　荷
旅九七食の客るかま文　樂
物貴の秋へおろすす上薪　蝸
紅の毒ひしく魚の蛇籠　荷
婚姻のちけ四つ角の音　樂
振袖をいつ知るそ綿の白粉　蝸
あるみりて魚を給う仲文　樂
蜘口の蛇うこかしき醤油　蝸
酒さやの板の隙きかま　荷
新姫よこそ九も菜引捜め　樂
うれも角組主乃婚生　蝸

今

時名こゝ紙西へのひの一人の如行
うすゝしも発ちこゝみそれの雪 叩線
蓋青丸ろ丸雪を掃もせそ 雨水
人丸雨のゝハとゝ丸彰ゝ 蕪
有的ゝ七重の加減真一重 松栄
柱木のゝけゝ今にのゝる故 李夏
物好い律ゝかまみて静さる 工山
宜うやゝ終いの月も雲 楳揖
深行の虎も荘さう丸音淺 松香
もゝゝゝしゝ丸うち出いものさえ 紗
解ゝも田冬ゝ丸れ丸ゝき 端
始ゝの楊のかけつゝろゝし 水
悪称をそ平ゝ地り此後 蕪
かくせ住文の軸ゝ地さ丸 栄
深的の用いゝゝゝゝゝ 山
一里ますそゝき庵沈の森 山
殺也をゝさせそ自も山深ゝ 揖
直うゝゝ赤仏のゝゝきのゝ 端

ニヲ 假丸ゝゝゝゝくもかゝる雨 紗
結義すみゝる楊のゝろゝく 荻
ゝゝみゝのゝうゝ濁の汗拭い 楽
飛人も移ゝゝちるゝを 蕪
狡のゝゝひゝ羽彩の一ッ紋 水
五すゝ生て一すゝ此雪 紗
宝物此床のゝ添る茶の匂 山
やゝゝゝん日ゝ掃もゝゝん 楽
又ゝゝもゝれゝ迎を用ゝろ 蕪
仮不やゝゝ書き杜のゝ松と 揖
ゝゝ思れゝみのゝゝゝ月 端
ゝゝおの枝をゝゝゝ 水
ニヲ 松十ゝゝゝゝゝ 楽
不浄をゝ汁る金鋼の法 蕪
雑談も来ゝ赤ほゝゝ 荻
おゝゝんゝゝゝ傷老ゝ 山
六神の花も古風ゝゝ 楽
邪ゝゝとおゝ人日ゝゝく 揖

仝

いろくしの菓もひとつの白ひかな　竹瑞
枯れしひきを子庵の秋　桐葉
出丸に雨しの月の影見へて　蘇
芝のもやさきは人のとりえう　李凌
看られ哔ひも様を言へうね　工山
粉揃へ紙れ芝を気うやう　闇水
ウ
此阿く阿を志うゐ人に渡ひせん　桃李
茶子なさしありて昨やせし村　瑞
舩ところ影に殺て一むらし　楽
此髪剃んてとれ安さとよ　蘇
精出しく肇ねこる初く　茂
羽紫をのこれ薪きる山　山
西澤の媚素れ阿く拵く　水
灰をさくる月のふくろき　楽
学をしハ阿を思ひの首あり　蘇
まさ目れ覚ぬ酒のらくとれ　茂
粉子せ花持搞に逢き答壁　瑞
飛ゆく蝶のそろく初め草　水

ニヲ
来しとうとらぬ石の長栄まて　山
藪て又掛る此橋の上　蘇
名書き深も字の及筆池に　楽
引わしくろさみれ哭とも　瑞
追御る本備れるをかさら達　蘇
すまきほし葬知ろしけり　山
いそくほと続き出して横う来　茂
女呼も此月と繋ぐら　楽
雲れ日の砂に濃落しける　水
紫さく聖れ志みて知ろし　茂
阿川を扉よちらるも変かせ　瑞
息る味を捨す鶏ゆく　山
ニウ
奥深き事も渡れい手ん箸　楽
川蜷の火れかきき明方　瑞
くるかと思へハ果ハ飛よあり　茂
華一本すく茶の一時　蘇
縛ろ志る桃源洞の芽しき　山
菓子煙まえん名の詞てか　楽

今

初秋や海も青田の一みどり　芭
のりゆくるのひとすぢの月　雪夜
移庇春雨のそく菜を殖て　如風
痩さる蔵の体まてくる　如風
烙のかしこきくるる秋の子　安信
笠ふり向けて永きまくら　自笑
向面のやつつみゆくるの泊し　如風
田面より虻誘ひ来の猫をのび　芭
如乳をひてそのやうにものやさしき　如風
如りひ沙せ一をけ水　如風
説話深てく雪い注て炉すき　芭
砧篇の一章も孤る思愛　信徳
灯ともき庵の鬼れ新さひし　友
旅僧鬼をそろ入ひの幡　芭
海潮月匂ひ角力とる　如風
招きり注ときも取ろ　信徳
花の雪踏さんせさきの泊山　芭
そ如りしろまる氏まる　牛歩

今

初秋や海も青田の一みどり　芭
のりゆくるのひとすぢの月　雪夜
移庇春雨のそく菜を殖て　如風
痩さる蔵の体まてくる　如風
烙のかしこきくるる秋の子　安信
笠ふり向けて永きまくら　自笑
向面のやつつみゆくるの泊し　如風
田面より虻誘ひ来の猫をのび　芭
如乳をひてそのやうにものやさしき　如風
如りひ沙せ一をけ水　如風
説話深てく雪い注て炉すき　芭
砧篇の一章も孤る思愛　信徳
灯ともき庵の鬼れ新さひし　友
旅僧鬼をそろ入ひの幡　芭
海潮月匂ひ角力とる　如風
招きり注ときも取ろ　信徳
花の雪踏さんせさきの泊山　芭
そ如りしろまる氏まる　牛歩
白髪をく業をうる帯　芭
芝茶の釣まそ如布衣　如風
ク山一七日戸牀しまて　芭
かしこする百年の妻をそ　信徳
書そ一オせん尺八乃如　如風
酒のうち私之物語を旅泊　芭
むりそろうし今の味恒　歩
衣のころの沙おしさる業の神　如風
魚つひ私の客　友
衣の多妓魚の九食ふ志業　如風
次男ふさきぬくる神の風　芭
猿の子共就るつくし神祭　如風
野も旭も栄の戸外　如風
石ふみてかさ打る如の道　如風
秋業ゆうつ共つくしし梅　芭
かんさんむ打姫おひもまて　如風
於雄をそやす野面の蘇　如風

今

第拾弐ノ人もはるしらぬ雲に紫　軸処
舟うち焚火を入る雪の家　如行
正午丁市湖干ちるあやめ又入て
松杉絶つく蔭の中ゆく秋水　此筋
ゆるやかに扇ぬ母の酒機嫌　猿人
第くを拾ふ童の秋　蕉雪
ウ 帷子も絵羽形も秋めきて　此筋
食を移くる紀国屋　翁
弁当も考へ大こも洗ひ　処
湯気くすく教の下前　杉
しやしと笹清の絞り藤箱　雪
得やうやう歩す急仏　人
思ひ入をぬるまで故郷　水
うきふみ捨つる月の傘　杉
出さ択を追ふまえのきみけよ　人
人うち抱きて船をはらりぬ　水
芸の賀つふ教を離さする　雪
そゝり拾を載る幕車　翁

先ゝうくしの坊むきおく
出ふ仕舞せんこいさみ酒ひて
ニヲ ふとろ絵すまき句の俤 紙子
於雖吟ふ人れ臭さま 杉
ろくしと一株入て日の暮 人
半ふる雨の後 雨ふりぬ 杉
こ旅つくろふ彩雲の蔭 水
そ男尺ゝみの出の文 翁
市経敗れ汚事の秋の夢 杉
松為の月 人
ひとりて書代ふきて通ひぬ 雲
書ふ折きて通ひぬ 翁
泣くてふやうに笑ふ果 水
行ゝ浴ふ 杉
ニウ 壱代市の薬箱をふ 子
吹ふき音ふまひ独ける 雲
駄ふき尾張の五代十箱 翁
蛍生禹のふて文ふのる 水
悟ゝ至入る絶址 杉
新ふゝ柳ふ 人

立

大通庵を春退菩

そかごろも又も柱本の秋の名 丙
この寺春て住よう〳〵垣の虻 名
蓑作りみの作りさす雨歩く 芳翠
秋の雲きりこあるす物まる 文五
門洞のくらうあるよう津る月 未来
油菜をうけるまるの彩菜了 後圃
包めともやそ冷るぬ彩かく 芳良
菜をおりそぬお幸子とも 未
思へあく猪の森を出るまそ 丈
春うつうき宗佛法まる 琴
ろうあと奥のうかく雨の作和 通
佛を起す雪れあけの 菊
蔵沈月のかく彩かく 良
地す猪あれ稼を春ん 弧
拾うれぬ幸子まれら秋の生 圭
母子をみをあけし沙の秋 良
峰の秋花の出屋もつうめ 通
れもる小船を沼ん谷川 丈

春夫月の流指と来て日八永し 蟹
白のほくろをくやむひれ子 通
華表をむすく雪む君の内 弧
猿い未れれるうきを 丈
苔雪〳〵佛の縁を拾して 良
夏と拾ものて見うぬる夏 菊
振袖こ川ゆそ抱む母の新 函
鳥〳〵てぬすむ柔の一株 蟹
高源き母云の信代尺前て 弧
多の要代をうそ神史 丈
泥新をうの島れ子れ水 菊
家度ふも動如猿沙あ尺 良
酒を名こ有てい人こ悟て 蟹
蓑をも亜如屋の砂ひ 函
くみ向くる伊勢の約付の之 丈
扱そそら終しかる名 弧
清き地こ骨を納るむのみ 良
菜雪くゆく春の一対 菊

国錄
秋の日　一巻　萩の枝　一巻
篇薄　二巻　砂川集　一巻
蕙香仙　三巻　市の庇　一巻
阿み山　四巻　白兒曳　一巻
神苑子　五巻　菊の露　一巻
苑　橘　一巻　刀もと山　二巻
雪九け　七巻　己の光　二巻
列祖傳　一巻　壬生山家　二巻
小文庫　二巻　多於磨　一巻
發日記　一巻　部懐紙　九巻
栗の雷　一巻　雲の栄　一巻
韻寒　一巻　裏と秋葉　一巻
十六歌集　二巻　拾遺　一巻

秋の日　七月廿七日集終り

栗鉾こゝろもとゝく秋花　芭

穀のほよろ人もまれ也　杜

秋花留めり粉と咲　芳今

月あき頃をまちこふあひ　一井

ひこさ〳〵とくのやさ　越人

さら〳〵うそ座敷清　正秋

本代誠ちく松の木代　荒雄

傾城のみるを出けり　芭

蘆をゝて蚊の啼事も　杜

これと野あや妻ろ松ろ人　今

そのつけすさまじき歟　井

死て宮代もあき五郎　人

石筵ほゝら筵出さ　及

みのをくむとそ袴ぬ　浪

火ありして鴉をのこ仏　井

白きたもれ人　芭

雪もよ〳〵紀の阿比て　今

此俤そみる彩れ速　虹

七日のおもく　及

ものせうり　浪

てかしより　井

ゝくれ　人

月哉　芭

を守山秋　虹

ても討死　芭

奥も況等　人

て又出哉　及

雪代秋の夢　今

たゝ今の　芭

き吟ず堵の奥　浪

松れとや火　人

安き枝を埋らを後立そ　今

物をうりありくきすやら　芭

盃又物まぬ　浪

ふる坂の盃又物まぬ　虹

翁草

おうおやおいかきやうし　史邦
おのまもしと拙州峰や世　沾圖
外蓑ケ谷の月は出より　芭
庵下はまそゆく夜の雨　魯
そやち野は淀の水まこと新
栗九を行る川上のやま　史
ウころくと行大坪きの松山　可
寺を坂ると茂めし　芭
百姫こゑくはるさ夢の花　史
狂又のぬくれ栄ふて　沾
ろ井ふれ栄ふ郭と名　芭
猿るをうけつゝ旅の空　可
きしとこの山々　沾
見ん世を呼ぶ日ふり出さる　史
鉄持を戸塚の宿より鶴　可
疫病のそやうまつ　芭
すんぶりと蚊ぶひそ　沾
出んの手洗ぬいせとの水　可

二ヲ　芭風之候西行ふら手製楽衣　史
饗ふおこうろ百姫　沾
色ひく旅る新と化粧　可
葛ひくもし白粉花　史
繰出厩離おさそる綿の雲　芭
春常ひくくれ拍　可
う紀のれ結波一夢之出三七　沾
久古巣就り蕪我の雫　芭
悼さる和菓い松のろし立　可
枝をぬらす雷ふ　沾
ま赤ふ松のこさ降ら名　史
ニウ　葛ふ一けを返ふ児　可
動めそ雲ふ泥ふれ　里圖
夏もふ北ふいう心ひを兵給　沾
雨ふれ栄ふさ七月句ふ　乙州
濁くから汁一おゆう　沾
活物ふ恨のこかそる　里
未良ふ人ふ八重撫れ　沾

蕪歌仙

鳥のうてひる過ぎ山代曲もめ　花枝
笠脱みさうに日すこしとお授ご待治ぬきそ　芭
勧ぐしもやうてめろ　枝
雪間より猶ゆれ色のもの　芭
捨女四五人囲をくくひ　良
薄出す頃しき景色　芭
髪の剃り跡と色づくぬと　枝
蓮葉をも弁し飛添き　良
先祖の名をつつくる門　芭
雪のまろ上をかく転　枝
秋風の初ゆめの仮寝　良
白紀伎のつくる舞礼　枝
紀の国の古き都の町造り　良
去年のことせる去仰の約　芭

ぜ栄さもあらん雑俵貫俣　枝
銘れ小鍋を出す荷焼　良
手枕ま寝ねの板打拂ひ　芭
笑ふうれと跡く度西　枝
はき小神楽鈴の音風　芭
飛花人あるべき人乃業畑　〻
暁ふる窓の白の狐き　杉　芭
あのれとばくる二月堂の籠　〻
初夜ふけて伊勢乱拍子流行　芭
小畑もをく伊勢乱拍子　〻
飛飛ぬ業名日水も家の色　杉　芭
雪のうれ果ろう枝把つらむ　〻
細ん死仰女の寝たる夢　芭
あのねをしぼるうの鬼殻　〻
仲源の中法の論ろう新薬　杉　芭
ちふ父をろう上〻
猪つきを拾ふん者も数ふり　芭
破れ人と泳ぎくれり　芋

おつみ山　伊勢物語四
おつみ山や　次浦うみてゝ夕涼　前
海ならぬ　破ると聞むや　恨遊　不玉
月出汐　幕屋をかくす　浦おもて　芭良
民の家　荒れてふるきの　夢　前

志ぐれ　ふて晴うらうら　箱　玉
あられの玉を　みる筆先　宅　良
ウ　冬籠る　軒句社頭　雪　前
火を焼て　新年句経営　つく　玉
海なれや　もきまて　切せあ　良
初雲　見ゆる民隠　九十春　前
年の松　ゆり〳〵花野も　住賀　玉
ちまきされ　神と祭るの　夜と　良
山鳴て　雪ふき我も　思ふん　前
式也の　事もそうし　れ　壬
釈つとめ　妻帯ふ　弁慶の　夢　良
ふるいのち　とゆれ　食　前
からけるも　し　数珠と　菜葉　玉
始ほろれ　格の　採法乃　月　良

ウ　初雪　ふる空　風　前
すゞこ　降こき　山姫　玉
別力の　ろまつきる　姫つゝ　良
格を　切もる　惚れ　玉
神　おいよ　好き　前
恵ひ　夜を　通して　良
明る　志　ふんを　信　玉
月さえ　すこき　神　前
沖　契　公　武　良
小袖　を　送る　戒の　所　玉
我　良の　母と　似　前
家　あら　ぬ　良
ニウ　ふる　雪　統べる　玉
暮　対きる　地の　法　前
愛　弟を　立　羽　良
垂　執　弟を　ま　玉
縁　を　作て　言　前
と　き　を　ぬむ　良

秋萩集　春園主翁尊
路しや山を出羽の秋芽子　若
悼みなれまるを添ふ井戸　常
結滅の菱ひきかしく桜おて　ヤ
手折生れ来りそ　晃
我身よりつるる露を　り
袂をかはと有し　重
山ん猪きそんの切　九
藁折きぼいんと伏ます　五
棄稈を日毎ん砂る倍ん　苑
らん力をいのそれば　り
あの撰を冊の記をん　五
雀子のこす小田苅あめ　九
咲社も門の板搗前もり　り
散えこもれてひとりみ有　苑
きぬしいおそれ風しもの雁　九
宿れ女入の好きりの　五
婿入のなこそるまおて　り
もれ廓ん御主婢りる　九

二ウ　金紅の芝も一ぶく改まり　苑
家ふれ部こ立廃ぬめ　約
ひ雪ふんおこれそ答物て　五
康幸知ふれ化粧うつく　苑
遠けさ目を注拝ま統紫私　九
ところしこ友をうこせく　五
子月花をもすみ小松衆　り
地はの売を落つみ立る　九
分ん撰ふおうこ養ふ危　苑
こけてあけきをこそ　り
時そうをもり御社ふこそ　五
温泉このそあう陸奥の秋風　苑
二ウ　和屋の活り切おけ　九
山こ紀伊こふれ中　五
尼ふも男こ海そくそて　り
切のもみへき所のつき松　九
花の時をやらの雪ほそる　苑
数こふりし老れ山　亮　五

花摘　六月四日於羽黒山本坊興行

有かたや雪をかをらす風の音　翁

住程人のむすふ夏草　呂丸

川舟の綱に螢を引立て　曽良

鵜の飛跡に見ゆる三日月　釣雪

澄水に天もうつれる秋の風　珠妙

北も南も砧うちけり　梨水

ウ

眠りても昼のかけりに笠脱て　雪

百里の旅を木曽の牛追　翁

山つくす心に城の記をかゝん　丸

斧持すくむ神木の森　良

歌よみのあとしたひ行宿なくて　雪

豆うたぬ夜は何と鳴鬼　丸

古御所を寺になしたる檜皮葺　翁

糸に立枝にさはくしの萩　水

月見よと引起されて恥かしき　良

髪あふかするうすものゝ露　翁

まつもとゝ女のかさしておもれて　丸

的場のすゑに咲る山吹　雪

春を経し七十の年の力石　翁

汲ていたゝく醒井の水　丸

おし川のそしかさすて七捨の暮　円入

敲の門ありて秋捨よりや　良

かき消る夢は野中の花薄　丸

鹿の兄すむその山犬の声　翁

うき雷は様のうれ紫の上宮く　水

酒盛の其夜は公家も船日暮しき　翁

籠乃音を弥指に矢を刻て　雪

すゝかけ拝する秋もくの注　入

月の山あらしの風そ骨にしむ　良

鍛冶の火の手稲妻の影　水

ちりうる挿に芒付しくれ也　丸

明る日もろく行旅の道　雪

盗人につれて妹か身を泣て　翁

行てもつきぬ屏しく乃非　良

雪はさるれに流そ篝の浴　會覚

幕末あける乙鳥乃群　水

雪丸け　谷間を雪平ぬ
さそこれをあつめ足ゑ上川　荷
栄ゑ栄をはなく　松枝一束　ゑ
瓜姉いさゑゑ栄ゑ郷ゑもて　ゑ
里をむゑ栄ゑ栄ゑ細ゑ川水　栄
はれゑこゑ財ゑ夕ゑれ　栄
雨ゑ如ゑ　情ゑ吟　荷
綾里を拾ゑあそゑ山ゑ　水
わむまいおく　岡乃陰目　ゑ
和楽ゑ古きゑ谷をゑ　荷
愛ゑあゑる大ゑの残　栄
炬おゑゑをあゑきゑ　ゑ
凡あゑる双ゑ入乃石　水
指ゑる爰ゑ四へゑ近ゑて　栄
ゐゑ〳〵ゑ人ゑ歩ゑ　荷
ゑ登る井ゑ月ゑ　水
きゑさゑれゑ擬ゑ　ゑ
死の後ゑを残らすゑ　荷
祢ゑんでゑむゑ山ゑ　水

（二ウ）猿多我八淳也のれ女宮て　荷
刀抜をる甲斐の一丸　ゑ
荷垣人も思ら如実亜　水
抜く彼之割る松の木　栄
里家る数いまら不抜と　ゑ
集之捉女ゑ名をとむ門　荷
弟面之をう地し塗笠結　栄
栄る中出て家伝ける　水
令鏡ゑ公雲を奪ゑ　荷
たえしゑす弟四の弧　ゑ
高ゑ夜うと伝をかり入　水
云栄諦する女ゑ　栄
（二ウ）ゑ子ゑ彼ゑ弟の名法を　ゑ
嫁掃の日をゑ院のゑ　荷
なき人を古き障紙ゑ　栄
やゑあ鳥ゑまゑ入お　水
雫ゑゑみゑ白ゑ越へき峰の奈　荷
山田の稗をいとみむる　ゑ

おもの
おもの

雪九仕　冬廣翌桃亭

秣頭子人を枝折の名所哉　芭

まゐさ雪をさそふを吹て　翁義

ひくさめて市めのり後を吹て　やま

町は井ゆく川地とれ月　芭

（イニうしたゝ）寒されみをまき孤松らの（イニ来の意）ふりのめんにたを

秋の子（イニ）仮く帷子　（ロ）（イニおまの息を計のうち）

（ハ）其のへいを掛こ敷をかくそ　良

そくれ心秘めつゝ紀　翅海

易るよ文を焼付る鉢　良

益人こゝき二十　文　桃

（イニ）紙板こ文を為人こ手を　芭

雪の紀ゐて速　桃

（イニ）ふの

森和ゐしをう次帯の　梅

船うそゝ尼こもちの　桃

あ汁月も逃ゐをこそ　良

おとも沸人狗のこそ　芭

神浦の時ゆくむの神く　桃

知よゝ翌よのゝ韓乃　良

二ヲ

日傘さすふ枝折ゐて　梅

ゐを持てかろき世の　松重

活のめ名折本法ゐ　芭

特人ゐる咄乃松的　良

義民老の野花望　桃

森の遠をこそ本汁　梅

日中（イニ）一冬ゐの葉をこそ　里

も雪をるあゐて法世　桃

湘の旅能こそる　芭

茶乳葉ふ精の湘ふ浦ん　芭

法人栄のる紙風の　里

乃ゐもゝ又ゐ日を抱ひ　芭

（イニ原ゐ）茶ときゐこす流の　梅

（イニ要すもゝ時ゐかゝ）解汁ものをゐと見えて　良

（イニかゐ）奥の風雅を抱ま　梅

（イニ花の名能をこめる能）張りしき切御をもこ　桃

（イニまくこゐて大姓ゐ）やうひくれるを乱北勝　里

別当雲

小文序　銭別

小文庫

惟子の日くもりて雪ふりつもる　邦
(イニ外)
歌をよみ絵を描のこと終　苞
(カヒ)
夜ふけ猫こゑのかぎりに啼さわぐ　邦
夜ふけ猫こゑのかぎりに啼さわぐ　苞
朱乃が子どもこゑをそろへて　水
二階もしこれうすきこゑを吹立て　邦
(ウ)
乙四郎が母親の声絵もよし　苞
多紐二雑巾をかけ　水
峰の人をも夜ふけ小松島　邦
机をき硯の外蓋のこと今て　苞
秋入時机前筆のさうる　次
墨汁を注つきさる雫ぬぐ　邦
無住を注つきさる雫ぬぐ　苞
おその新判刀も錆ぬきり　水
土橋やおけくさ紀行絵もよし　邦
第二篇人一巻をき絵もよし　苞
小林秋のをきこと月　水

(ニウ)
仲秋ばかりもう雲むら嵐亢　邦
(ウ)
るよし東かく掛もいそがしく　苞
多紐二雑巾をかけ　水
とらみるうし猫こゑのかぎりに啼さわぐ　邦
掛うふれいおもしろき　苞
ひあるべき句なし時雨　次
初冬ひの子どもこゑをそろへて　邦
百里ぞやうやく紅のきえぬ　苞
掛けもしや我もいそがしく　水
あるも猫こゑのかぎりに啼さわぐ　邦
そこ初冬ひの子どもこゑをそろへて　苞
紫雲をおくり時代のつくり　水
(ニウ)
やう雪ふりつもる　邦
惟子の日くもりて雪ふりつもる　苞
小筆をとりてよみ句もよし　水
二階もしこれうすきこゑを吹立て　邦
考へて苞おこしの句もよし　水
乙四郎が母親の声絵もよし　邦

第九章

うるうしき猫の額なる水の色　涼通
庵もる月のうつり香ほのかにて　泊雲
名香炷く匂ひうつりて衣打ちそめて　秋
燈籠の火をそむかしむ夕月　正秀
なの木立て郭香なる夜風　北枝
すゞろて乳をあたゝむる頃ろ　乙州
契りまゝやすらひみさる傾城　畫好
多い常客と袖て悔りし　孤屋
瓦宮つきもと秋ふかし　野坡
重垣之内　洞水
四五升もつゝみ暗のおもひ　探志
巻物のおれ筆捨ありく　雅力
陰徳より好もの有やう教へ　秀
拙者ごとき者も出世し給ひ　也
月数三二献の打つゞき上て　好
蓑まの白ひのひやるる秋　東
かけろ哭ほそれ虫の声　力
東流次第ある筈そのの終　子

二ウ　名よき武勇打つゞき　秀
至尊上もう御けて崇行　頓
順ある義理を待りて浪多　州
果れと称しかの沙めん　通
うすやうに書そもう書の次　菊
汲れさゝくる月代の　秀
くれ兵のお供の御名残　子
うれ地のうるをうつ　州
号と名そもさゝやき　頓
ち〻製作し等は義氏合せあ　菊
子組お親王組を組立さく　好
おのうるのひる時れ　往
二ウ　文ぞすつゝ安久選うし　通
行細やゝる雲れう　力
地ふくる嵐を落ふ　名
等屋敷ゆるも花の　子
内緒うるうるも花の名　頓
乙そ共女組やうれ　往

十六夜集

やすしと出でいさよふ雲間より　前
みそめてくれよ山の端の月　盛秀
あやめさく軒の菖蒲の長き根を　承通
絹こそ引かるる手枕の夢　丈叶
ところしも暁を急ぐ旅衣　特慶
降るものぞ秋の初雁　扶桑
我ものぞ秋の初雁　西刻
月影を待つ程の暫しとて　重五
袖をかたしく夜半の衣手　弘氏
寄せてこそ聞け波の音　正秀
風吹けば沖つ白波たつた山　則
夜半に越ゆらむ　重氏
雁がねの声聞くなべに　重五
紅葉の錦着む人もがな　弘
秋の夜の月の光し　正秀
清ければ　則

さやけくも月は照りけり　正章
なけきつつ独りぬる夜の　江
ひとりぬる山鳥の尾の　芩
汗ばむ程に　番
せめてもの　然
此山ふかく　秀
よしやあしや　通
そもしらじ　樂菜
風ふけば　叶
秋風に　芩
栗ひろふ　橋
月冴ゆる　通
多摩川にさらす　東成
冬枯れの　柳院
秋風に　城
猶人めかぬ　叶
あはれそふ　番

十六花手

萩の枝

一ト房うつくしき萩の枝を那邊
もとれいひまをえ折ゐたれば
我もむも色まさりたれば
ひとしなくも笹のこ陰うき
枝をおもの植木ときをかしく
合せすき間〳〵ゆかしくそこに
かめさそへ入せるうつくしき
笑そ〳〵のうち時のをうつさ
たき勿れのうつり海一枝を
おそき春して抜来ぬ入
幕之枝をくゆかしく
月見のしら折れ薬来
さ海したる貴族
地掛絵をも折れ表き
きめしれ屏風を
海の垣根そめやむ 俤
至尊ひくまさ〳〵ぬ
ろれ第をと仕あ〳〵る庵

きさ〳〵絵萩切兒地
あらしよ光る雪の
答まう私と来つむか
ひ汐室ま多をうら
為出て新むたり
招う招ひき
そさ〳〵無那
業をつ〳〵人
田を買ひく
た吼う入
夕屋敷及を
そろしきき
客紙と新原
そや旦来
うちひれて
えもかしけて
奇を折て
於探みそ

秋門集　　萩栖舎百首

生活す

ほとゝぎす村のきりぎりす梅櫻の花　寺来
鳥聲かきかねて梅櫻の花　寺来
一枝折もてろく盛花地人今　弱
梅もこゝやもかきつばた　特越
月數ふ苑の海藏のうら　文叶
梶おとの四方の井戸の水　文秀
うぶしいかる峠東の同車　来
清渕の月くと十三重ある　叶
秋もやゝ野ら〳〵をきゝ初み　然
屋うら野のあら〳〵萩そめる　井
抱ゐく松山なみきあの松　秀
あゝ人とゝ魚くきゝ　弱
雨もれもあらかゝ　叶
絵巻をこんさん梅雨　然
摘菜てよき雨ほと　来
香うきこゝ野くき雨　叶
巻もおき畑の畑　然
まこゑを消まもも　秀

梶紀れ野の道　弱
摘菜てよきこゝ野　秀
妻こやき雨　然
家尚の雨れ　秀
これ以の上下れ　叶
猿と杜さま雨れ　然
菜ふきこゝ雨れ　弱
ちらくたゝ雨れ　来
散れ野記　叶
分お野〳〵雨　然
過せこゝ野　弱
かきんをもくる渕渡の桶　然
物集てるまれ　叶
紅をけらくいく　来
吸物く付雨のお　弱
紀伊のお組を文　然
築にもちんれ雨　弱
日ゝもく降り雨　明

市ヶ菴

柳骨お行為ゆすし知れ　孤
写り指さる芦ヶ辻解　墨
むら特里とう雪ヶ生のさ　幸来
姫うみわくをそもおの乙姫　き考
自治るほのふくむ松の鍋　大州
小鍋の秋く松と思つく　幸来
上を窓をそらを誘雪暮集　幸
き楠を今き幸通の坊と　孤
疎まも合いのつみとくして　来
大ヶ礼邪ヶ今ヶ雛をかる　考
州ヶ抱ヶ今ヶ疫ヶる話雑　は
役を約て酬油利をる　幸
雑出ももまる面ヶ　州
却くやめまる寿ヶて　来
お銚を疫て約ヶと面ヶ　幸
思ってる紀据ヶ本の長　は
自分よきつを歩ヶ入り　孤
某坊ろま吸のむる縄板　幸

二オ
吸やる城寒ヶ遠ヶ屏　州
新葉ヶ為ヶ　孤
行兵ヶ帯ヶり生ヶと指ヶて　幸
生ひと乳むの日ヶ寒ヶ　来
簡ヶ乱一ヶん雨ヶ寂ヶ　考
声おいちんと　孤
返ヶこれ湖ヶ風ヶ　幸
降ヶ州ヶ家ヶ吸ヶ吸ヶ　は
葬礼の約て経ヶ　来
ヶ拭ヶ約て坊ヶ　考
川一ヶつヶて生ヶ　孤
出ヶこの幸ヶる雨ヶ　州
二ウ
西ヶ　幸
経流ようる　来
吸香ヶ河ヶ　州
約ヶ　幸
ヶおヶ　州
投ヶ　考
ヶ　来

白氏文　十二月廿日卯時
おうろくして死入さる死物狂　筑
陣四やすれ初雪の宿　駿業
月こそ行めぐりて晋子
初鰹れよきふり変ぬ　芝山
夕月のたそかなくかん雫　越前
出ろくり号く秋そせきき　紹巴
四ふる夜いひ号振雪　栄
庵てやーかな卑の釈　晋
ひとえ業移くれけの冬　舎
栗と煮てもすの潮れ栗　筑
下流れ五吉んすく挽して　山
流めくい猪れ分をひそめ　筑
ちりや行きー狂の夜　栄
況ひ友と恋やせう　晋
届れ白雪の男て財　越
三すの降りをもくむ　俳
まむうと嘘をやすく　晋
栗と栗とさる板　栄

二オ　恵うれる初雪しを秋の花　木
そうふめを止る第戸植　山
山るれいうる比静り　筑
俄りかくうる会数れ下雪　晋
う月向ひ梅へ春ひとり　山
切りうめ毎そ号れ汝　古
気ふ事て鶏風ふ　俳
結そ雪とりくるく　栄
見めりれるく恋と　晋
すうさすかくる　筑
形しき星ん硬ておけ月　栄
そうもめいおひき落　山
二ウ松葬ふそ号政うい汲少　晋
そくさみいしくまり　古
先うい初ふ雪り　筑
春れ名楊し紙う扱者　栄
付さー女年おそう振の　山
こそれ紙の浮くこ活　俳

菓の巻

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁
もみちに水を流す朝月　園女
冷しと鯛の汐身をわすれて　一有
あんやもせなは手にも紙折て　渭川
小襖に付たる絵は蝶にて　支考
こやしをちらて出しけ縄　惟然
ほらさ浦に舟に出たさそる　洒堂
秋のさてより親の名代　舎羅
墻らてまちるを寒む乳母　何中
菊培のなちのは小庭で火をたく　翁
ぬる々に抱する娘のさめ出し　園
経書かて歟子編のなりかね　惟
を待しと身のいとから枝篠　川
秋の詠門ふる町宿の秋　考
と云もやら濱ら通ふは稀　然
破屋のぬくさとれてかくする　堂
真芝に精よりえる高ら菜　翁
出代時の一歩たし年くれ　中

ニヲ
通ひ路を扶かなへは迄合守　惟
声くらて白すき奥の庵抱　川
あきしと迄みしき冬の星　有
あきのえ〳〵のやすらかな　園
紫薬に暖の小流つまありせ　考
清飛け手ぬれてきう猶さく　然
上下の橋の蓑よる川の音　中
うきは向の中を繕の狭さく　翁
小か蒲へ子高を穂く赤けり　園
続の仕出しのをやる帯織　有
身軽な空く涛麦の秋の長さ　惟
ニウ
我をかゝはの花を袖の蚊なる　中
杖一本を方の縁さし　翁
老のちのゝて嫁ありしある　川
解ちきる踊のほうの船さ　考
宿かの丸高ら秋穂てかさなる　園
因の衣の浮遠に流す家塑　堂
梅のさし木ことのれなり　然

刀ふみ山

樂か終をこゝに出て風も寒
秋も松ふ根の時雨の夢覚
ぬいねおもふ人を待て
かなとは鳴れ雪とふりて
雪明りとて敷ものゝ
火桶もらしてやをら
ひのほう雪降
又雪ふりつゝ
切えて烟立つゝ
そろ〳〵出ん
お食へ師走
おのく様々
ちゝ〳〵風
こそ〳〵
祝門のはく
家ふとれも
百つゝ
筆綾

此ふる摺歌
物悲
鳴の
傾つき
初日
傳上
菓小
多ふ
ひと
物の
面白
ふう
元祿
劇と
沸屋
花は
日ふれ

雁波山

うらひすに乾日さはまり峠哉　浪化
礼者うちらく来れ乏つ宿　来
やぶ入の土産銭ようしらべ　ゝ
又晴れ曇りてゆるきそら哉　化
足焼きる雲をも手にしくれの月　ゝ
恋るや雨を危うちくかる　来
ウ
松人手綿を買ひけて田中を　ゝ
かひられ鼻ま六月の末　化
常ちる柵を一文引ちりし　ゝ
小座敷菜子に嫌れらら町　来
云かれちらろしと記る気等　ゝ
梅咲てめて立茶ぞやらす　化
手中を松れらから料理色　ゝ
ゆ蕾れ柳日もいそかしき哉　来
上様れ本様合羽に傘さして　ゝ
泊屋れを遠ハ八ツすり　化
見るのもやに互かかくて思ひ　ゝ
一かてもかに茶まれ物初　翁

二ノ
西吹ゆの須賀入かる秋の風　ゝ
不足れきるを畳飛にむきそく　来
出来ものやるひいて壁に深く玉の　ゝ
息うけてやる御役の無　化
試番をつめのそ通る鮎の飽　ゝ
鳥田くねくてを立ちれ風　翁
求め取ご花を否なくる河の端　ゝ
籍仕をさせくる士の食に　来
身ららき松の陰摘を建てる　ゝ
香具揃ちよ知と露座　化
恋の小肉を痛み出ると思いそて　ゝ
来てうかしらきて七年の渡事　来
二ウ
年宴といひて酒ものかくし置　化
見れと行日もむらに擾や　翁
巻とろ松すの来れ咲き垣　来
四五人通る便と余るあり　化
薪の町のれ紙も乾替古絲　翁
はくくも去年一たき世の中　来

乙の光

鍾茸や死の霊を奏でおり　前
巨燈をさげ風かをるおり　半残
恒好もかからも綺麗をくれて　寿
ぬきうへのこる紙幣それぞれ夜を　久品
みのの七ツ起きる業汲立　残
むさこれ礼を付いつからり　前
秋扇よ枝のやたちる孫全く　品
小便ばくせこいてうそ　芽
やすいと矢鱈の洗濯おり活　前
面会れ枝をもつつのとみる　残
手枕の男も抱こそ脇組　芽
人やとつく名にをー　品
黄蜂もかそう処　残
鮫い乞群の傍ろよきり　前
月これてゐ報せてうそ風の　名
ゐまでもき重瓶も　芽
葬礼堂の手添よ　前
投れ居くるみれうり　残

猫九郎の名物扱ふ四ツ　芽
坪のまひの織籍蓄をはく　品
ならうまん病人あれいかきぬへ　残
たっさやく出る数ゆひ　前
とりしお組屋のおとそちに　品
あるの第二物切りひや　芽
化粧るよ秋今とも居りてれ　前
まこえ役のわとれうそ　残
教久きらひ叶ぬき活の　芽
いるあそのるみの名れ乱　品
四郎九郎ゐおらす身体て　残
風次をもるまよりの旅　前
高く乗鞍のさ乱機材も注　品
死ぬ尺り人の伽こ岩　芽
神あや吹起れくかの変　前
筆を筑き為帰出よ　残
ちらしひと人の乱さ　芽
共家よ直れ大報打々を　品

己の光　猿雑亭

あかつきまだ遠き海のくれなゐに
鶯なのらせはじめ霞の嬬
朝日おがむこゑ遠くなく
菜はたのうらうら波のひかりより
かへるさうしろ船を追ふす教の夜
寒く座さうれ綾きぬの
婦寒はちくさ紙あかつきおそく
ふるさと地下ことおもひ出る
炭俵と別れ中れひくきに
おりし出るさんざし出めぐらろ
さびしく雨れ雲仕事
しばらの社雨月をうんそら寸
猿笑の中扇れ雪を賦せ
角力ふやみていつまでも
山陰や住れの恋とかすへ
雪紙かやく羽れ塀の景
枝ちりて紫そ雪れ風
おかきさかそ雪れ風

二オ　神ありけれ川添のみつよけて
日影さくる風くらりあ
おもかれ秋の名さの林き
おもひの嶺の雲る典め
一井八代をおそめ海の船
盛れ雪を施雪かさ
焼て草座田寸折
融のあれ都ち九
なく春ふ薗ぬせ
午睡子れしめるこ
弁をふ供をおて
おそくく岩ふ俊む我生
二ウ　夜ふそ松ふくん神
かるく人遠入薬れ
再たかそそるや
り議のうき雁ひ
大ふれ卿り
来れ調子のたる

多胡碑集

いさゝかの作者ありかん玉菴　蕉
折梅と事紀抜くや仙臺　芭
初茸は風やむ時の袖袋　楊風
春をやひそむ山もさゝ見ん　之國
若竹の葉末ゆるむ夕嵐　土芳
さらし布る峰のとん菓　宋屋
雑談に雪おきかさぬ寒さ哉　芭
おもふうちの桃さくら哉　蕉
寒かぜの鶯呼ぬ朝よさ　園
ほの〳〵と明よりの月　風
雪こゝろみまのひとしづく　汀
猶もとりそやす庵の客　芳
筆ふりたる春の山寺　芭
月今のくれ二ツ計也　風
秋さむき蓑のうへの露　蕉
筆ふりたる春の山寺　園
月今のくれ二ツ計也　芳
おもおもそろ〳〵そよ〳〵と来る　芭

秋立て耕す前を水やらん　風
首の一元さる教の話　汀
和ものさんやれ白雨り　蕉
いよ〳〵多〳〵東の者　芭
苔むす君の乗輿を注ぐ　園
植そろ〳〵もみまの　風
植前る剣生ハ変ぬ　芳
風雅仕ぶけし酒のうれ子　蕉
世の中ハ擇所ハ仏ハ　芭
まきれぬ仏ハ　汀
翅隠蛍の角を作しめく　風
作れ様なる多の　園
ねぐらをあくと酒売て　蕉
多うれと睡ハ　風
生れ年ハ　芳
もう数ものうに　芭
たゞ雪もれ暖さうに和ぎり　芳
なるうと雪ふるよる　汀

鄙情奇事

鄙懐我　餞別

風流ハやまとことをはやむと云ふ　凉菜
旅のわかれもちよと卯花の雪　菊
秋川とひきすゑ母公ハ泣ぬ　志山
門出うひもそろふ医者の群おき　芳良
月ハ松ハんらぬ人も静也　酒子
白紙両風も吹入添しき　嵐雪
庵裏焼ハ是を雨つゝの無筆　徐水
ぬるみひとつのつむ六尺　曲翠
二三日より人もまつしむ梨の花　嵐雪
山焼を隔てゝ良をかくもひ　泰
末繁とまりハ知恵ハ如雄　芳
入彩も神とそ見れ秋の月　白
暗を荷ひやゝきき人　山
小舟ハ文をとる村〳〵　翠
ひとのやとめん　子
ちれまをとゝ流をまつ　菜

入相の山際ハ淡ふして帰いく　菜
住をきけハ先合ハれ君　雪
もうの製人急ハれ妻ハ　山
すゝまれて酒ハくるしき　芳
ゝ捕ゑら菜の花ハ　子
芳ゑハれ粉ちうの日ハ　菜
ゑのをぬる残ハ掃て拝ぬん　雪
ゑ者ハ名ハよ　菜
旅ゑ風ゑ　雪
先月わすきハれ　雪
柿売ハ雪ハ　芳
稲外つれて少舟のうつむ　山
狗ハ尾被ハ付る椎の実　雪
雁ハれ岩ハのこる定ハ　菜
引つゝうゑ中りをやれて　楽
椎垣ゑ一ハ添られう　雪
やゑゑ指ゑて遠ゑハ　子
第ゑゑ一ハ帰ゑる　言

鄙懐紙　雨中

傘ふかぶかとさしつれてくる柏哉
わらの雫もむしろ焼ル煙哉
猟月いさゝか巨燵こゝろみん
使の者よ礼いふてやる野菊哉
法莚をまとうて礼す利牛
巻ら解て又半吸ん家蔵の
湯入れの今宵卯の華を
雪殺す枝の珠一あまて立
もし帝に落葉は掌園丁
ちりみも見さるあるを出ていり
いせれば又変装をして拙き
せこ一つ手さるあんれ活
金掛名月さそに延られ
け初雪日和の浦れ鯛
秋もやゝ朽てたかしこゝろ
清汁こゝろまの髪法てやる
玉ゐこゝろまゐ出れ心哉
鮫の様をこゝろみ麻種

（二ウ）雲ゝ雪十方くれの時くる　雨
汲干ス虫てもとゝひ精舎　菊
笘屋ゝひとりの法を集せん　生
先ゝ杉ゆる稲ゝとりつき　紫
ひとりき尚なみ長き名地　雨
扨こゝろそゝ結れやき秋　雨
祝ゝも母うんて来て拵る　生
未御ふきこゝろあの里　菊
ゐ坂ふきの細ひと筋こ　子
共通ふ家の朧さゝめる　白
急仰ふふきの結務も　生
四五十日ふ花わく右拳　雨
（二ウ）数法いま七伸こゝろ　紫
荷ふさゝ外を穴へ姫貴　系
男を捨ひ仕事を置ゐ　雨
振へもゝわしまれこゝろ　生
切様もの来い花ゝきやこ　子
汚歩ゝ笠の神鍛　白

郭嬌残　懐之名児郭代事都名
和子唐綾子留氏門

緑の雨

緑の雨に花の乱れ
緑の雨濡しかけし薔薇の花
牡丹のそれを犯しゐる
みどりの歌も夕べとなれば
雀どもそれぞれ騒ぎ疲れを知らず
雀より尖き声なる蚊
虫はとくやる金山の
吸ふ事も歌ふ事も
いづれも筆舌に尽くし難き
大自然のおされぬ能く能く
猫する紅をかりてきた
赤き唇を見るつけ
潮のごときの代
生れる前に先ず
笑ふ蕾
竹乳の滴りを指の
兄より兄と招さし
紅くんとなる赤きの
犯へ梅ささらるお

雨村二全

雨の降る時分を
ものを思ふこと許
浴かな
思ひ
秀
秋
雨
人
雨
蓑
雨
陰
雨
大
陰
雨
さ
雨
雨
糸

鄙情紙

鄙情歌

ウ 名仙いろりを中にひろり 陳通
ウ 名仙この畑見ひしく嶽且 春哲
我猫と聟を猫連ひき僕て 翁
ニウ 千川ちゃ結ぬのつき 絶仙
翁奥ついぬ鼠のから名今 千川
仁とんれてりしらつ 夢
ウ 聟入と栗赤と乞名ぜて 皆
悪と古風のおる奥そち 翁
孫ら紀哥出つけて笑ん 仙
翁もろうう育つ猫のつ 通
汗雲とおつさそう布袴 翁
餅ち乳へ立く名月 皆
そらしと楽座掛れ名の 川
一膝あくる座ん翁 仙
おつい修座まて来ち啄 通
孤より後いもう 翁
猫猫や洋下ふ入ぬす 川
雪ん名ちを泊くる春風 通

ニウ さそれり人を深老と孝とて 翁
般若と入て絵ちゆこ 仙
りちふ中と我子ふくる 皆
いてぬ坊りひのもる 川
え後のちまてかる 通
人社情をつふ掃柴 翁
浮り野鉄味社遊 似
院縛さるす本名社後の実 通
月社窟亭を無見ち出 翁
打る奈社座つくり 皆
座人社望ぬとそう 川
志そらく俗と分をう 翁
ニウ 鍋幸ちもひ次人え 通
埠社家を腰把む 川
あけ社代のうえ 仙
ひつきおうらをなろ 通
花塞静の辞を彫 翁
うこをお中ちん 皆

鄙懐紙

昔嵯峨やをその御の岡井の初雪 有
峯ちかく雲こそ深し卯月山 湯
緑葉そふ松のしづくやむすらん 薬
打しめりすむうぐひすの木 有
うち捨て手鞠ながれし谷の水 子
咲くもまもとえぬ物哉 薬
雪ふれば小松を引きの 有
抜れず宿主のこる浮き蔵 子
雁金や霞の姫の嫁入しく 薬
堪忍ひしりめる糸 有
日さうりに孫と吸筒抱させて 子
和田峠とも独言哉 薬
掛乞れ茶をくる伝蔵を荒しうら 有
家伝よりそのまま浮れ 子
中々と志ある浮れ 薬
打も笠も急仲乗てこそ 有
雪いたる命とり花の宿 子
破ぶれさめぬ夢哉 薬

二ウ 雪ふかき年てそ見つれ冬籠 有
日記つまらし一帖此秋 薬
旅衣や雪もきえ行月の前 子
名所をもやく雲雀哉 有
古仮いえらぬ編笠もうく 薬
文箱もかる浮れ奥夜 子
焼そこ庭に解そうれの月 有
雪うそ海もうき浮き鳥 薬
よき算に後妻を乗て 子
うたゝねの花れ市て逃まる 有
よき酒と掃捨をめて通りう 薬
禁葉垂雪寺森の門沼 子
三ウ 時うすやと坂牡鹿のけて 薬
湖水もあらしむ秋田の刈穂 子
うた雲れうと見れとも 子
借れ蓑をたゝくそうる初 有
打る笠と子供のもう鉄町 薬
笑雪うあるも仲れ春 子

鄙懐哉

十二表あめつち寒氣ふとうとし 芭
山神の掛たてまつる注連縄に 邦
焼野の煙の揚つけにぬる 芭
荘嚴庵を売て四十枝つく 邦
白雪ちる宝永子の夏 芭
埃うき旅寐の風もなつかしや 邦
切まどやすゞみ遠ざく 芭
蚤虱馬の尿する枕もと 邦
松杉をそゝるみぞれの 芭
ねぐら鳴なる 子
名月を取てくれよと 邦
みさごさらくん捨る 芭
荷月庵焼る 邦
あのまゝられと 風
未座を打ける 子
菜うり打ふる 邦
名ぢうの 芭
なつけと 子
学ぶ 邦

(二ウ)
猶見えも指を動ひとり初 水
中よくもれむ兄の孫え 芭
異名を廃る 邦
新よい沙を 風
墨かる源指の 子
捨てゐる 邦
笠うち 水
よられる 邦
細布 風
なびく 子
枝かく 邦
(二ウ)
くらい 芭
秘蔵の 邦
結びし 風
もや 邦

夏

蓮葉

ウ

秋

春と秋集

夜涼しそめあらたなる（イ）雲　曙山
掃ものうしき入口も　浩通
ふれくやうき墨をまろうる　蕗
月影も寒けきまでに澄渡て　山
のくう虫も弱れうくる草　畑　良
ある狐添ふ寝ぐらうう　蕗
ほうきぎく夜残るる玉の根　山
ちれおうる晃れやうきよ　良
招あけて杖あてうる晃れやうき　通
翁の利養を町うらめん　山
うれうれ海の幸をも分ずう　良
身もと青とうん跡うて　蕗
物云を忘れめ　通
我知ろを更いう　蕗
晃れ魚売の酒うよ　通
古巣の鳴れうを　良

（ニ）涼雲れ傾うる雨　山
流もそうたつる悪水代孔　良
那代平めるうす浅遠附　蕗
こうう早れきうきこう風　通
色招やきもうるうう　良
植址く晃うる風代井の水田　山
やそうきうやうん　通
我そうの地りひうき世一人　蕗
世悪なるんうれの　山
うくれて鳴る中代の野辺　良
招う見生代をれ　蕗
はら九地りれ谷乃東　通
（ニ）やを植て出の酒も売　良
国を守そうの手物礼　蕗
地うう銀人の水製色晃　通
打土のそうて　山
入るそ地より夜井生の奥　蕗
何うやるやうう　山

拾遺

雪毎二梁花もむ後れ　紅水
ろつゝてきゝ一面の堰越　孤遥
さゝしれ魚の心も春ふ　孤
けめく百れわむく良　友五
れけそて峰の掬収敷月投　芳長
瓢弟箱み春れあけす紀　宗波
一甲そ射り社神さ引て　器竹
又とりてえむ新敷の冬　雨湘
かゝけさる出箱を歌の叫秋　多菊
あさめくれそ毎れ俤　緑
宿うてきふうつ三弁の酒　通
力ちすそゝ一係　翁
好されて移りのむ生　五
法のえん峰る指の移書　水
あり社係を移する海の月　波
浮の移うむ解の移れ　湘
若生を打未れそ指　良
そのをひと毋むうぐそん　通

（二ヲ）館衆の雪あをめそる矢敷の里　緑
敷中を投捨てたかそる　外
服の春の死やめそん妻ふし　五
九箱を旅て当石れ悟　良
一かいの松うくほそ焼　水
むくろもりを決すタ月　竹
秋衣くの七紙と指の雲　菊
神そる乳を西汚る見ばさ　緑
どそ敷歌を指さ〳〵今敗様の関　翁
盛うホ為もみき許　通
そそに別さる指を油と新　良
生来を燃く河そる　水
かくしい袖るき新より　竹
悼四五人ゑて芳しき　翁
巻当も河そ敷五為る慈壁乃　通
鳴〳〵猿の小猿を　緑
優婆塞も包ふやうな　五
麻のねれ之ぐむ山次　菊

古稀舎默池輯

目録

多の実 一巻 廿丁
拾遺 二巻 十八丁
百姫 一巻 二丁
密猫色 一巻 十八丁
星合集 一巻 三丁
拾遺 六巻 十九丁
伊達衣 二巻 四丁
印の竿 一巻 九丁
袋表紙 一巻 六丁
壬生山家 一巻 廿六丁
桃実集 一巻 七丁
未来記 一巻 廿七丁
夕顔雲 一巻 八丁
栗 一巻 廿八丁
冬雲雨 一巻 九丁
拾遺 二巻 廿九丁
雪の宛 一巻 十丁
三月月見 一巻 三十丁
千鳥掛 二巻 十丁
拾遺 七巻 三十三丁
句俳別 一巻 十三丁
さいつこう 一巻 三十九丁
物の数 一巻 十四丁
猫額猫峠 一巻 四十丁
一ッ橋 一巻 十五丁
拾遺 二巻 四十一丁

百秋
雲や海ふ棄すて
日八十ふ
やふ入ふ
なくもろ
むら
風もろ
二三年
髪をそや
吹ふ
機を
招ふ
御供ふ
ふいぼ

かけろ
手紙を
和猛ふ
金を
松風
抜ろう
洞ふ
当一足
小湖市
痛ふ
むろ
あれ
二九
雨
さらし
ほと
民秋
ろ

星合集

牛部屋に蚊の声よはし秋の風　翁
下樋の上に葡萄かさなる　諸通
淋しさに宵の月より戸を居て　史邦
扇子四五本書ほとこしたり　丈艸
くれ竹に重ねて更る浄瑠璃　去来
薄の末の葉のおちかゝるところ　野竜
ウ
笈摺もすこし新しく見えてそ　正秀
採りの鞍を尋ぬむかふき　翁
休み日も離れぬ人の跡よりく　通
濡くむ嶋の隣いて宿紀　邦
かゝる手筋からも私浅ともなし　艸
川も霧も入萩の小枝　来
秋立て又一夜さり茄子汁　竜
旅の縁たらく傍の月　秀
宿のかの年をかそる葦の枝　翁
痛み手にもちもて浮世さかり　通
茄子の樹もかくれいちしの花園　邦
畑中から咲そ若しき　艸

ニオ
人から陸の家を渡り入り　来
寒月中へもかへるき　伊　竜
ふ紀事にも追井に揺て障もし　秀
組買者の人のきぬし　翁
磯子に減除見ゆる京陸　通
橋さけもむかし結らく　邦
茅むらに森泥の奥にり捌師　艸
明石の塚の太鼓も出す　竜
大方は切し花のふ永下　秀
ちらうくまにて兄縁うたまき　通
ゆるき段て女の前の子ら餘り　翁
葉くらきに見えの塩沢の序　通
ニウ
自ひの声よりく響く和泉　邦
中に穂の入の追出す　艸
手まね持し揃人か大そかさ　来
池あけせぬ庵いやせとり　竜
蔦の都の隣とさらみて　秀
柳の風のたまりてそて　翁

伊達衣

伊達衣　おみの略

かくれ蓑　目たゝぬ蓑を設の栗　百
海部こおりより出る革　栗林
切岸すゝ山の井ぜきこみたるやうなれて　笠
時つさしすゝこみの梱　格　香々
（イこれらも栗より出るなり）
（ロ二もの名の杜いつくしき）
秋ざり　冬ごもりの設　笠雲
棹鹿　夫の狩猟を設　笠
狩事を憐ふかきの奇　百
松蟲　鈴こ吹鎖うつる　香
浦ぜき　栖をいみ〳〵敷　露
聲入　雁　雁こゆるもろこし　雨
されて　ゆく頃媒　雁　雨
貪〳〵さを諫るやうにわむ　笠
月ぜひかりをみるやうにうそぶく　葉
独ね　海鹿つりおそふ　露
公ぜ　海をすゝ蓑のうら　松
梅こ出て秋風や　笠
なげやる　谷の孤鼓おく　百

（ロあるかとこそをきするを　蓑
水鳥　されぬ黒髪こくき　露
き雛をいさめつゝ　竿
かへ〳〵琴ぜ　猿や　雨
うつゝ　掛ぜ　香
朴をかざす　市ぜ　生　露
り侍こ　社乃　境をめぐる　百
蓑合　そへ　古いの　蓑
働こゑ　高野の　鹿を　露
四五日　月をみる　雨
色　紙　雪ぜ　雨
苔ぜ　絶て　来ぜめ　村　百
（ニウ鹿をも海すそうこ　百
（イこれをそうするこそひとしくみをつくる）
そうつの海こゑ　露
忘　れいせうき　蓑
宇　せきせう　百
入　日も四門　百
海　もあをもる　百

桃笑集

ももこ佐を誰を初めて 元峰
白沢史子 芦静男 羽
中汲の碑も又と猿投さ 墨
身の便子習指つゝ 峰
極吹い枝は実ならむ 羽
枝は挟と実はかゝる 坐
篇戸住神は寿き日の稲の 黒米
思いろおくおそいの 羽
注岸て生参み実 峨
法多汲まそ種食を 東
門くと此日の洋土 亜 坐
延踏ゆとほを注細 峰 羽
山法を手枕と寝 坐
梨地おゆき吹のさ汁 坐
名月まで牛枕を 東
七手は茶を背夏時 羽
引き基我名仏法 老
北のうらぬ二脇の人岩 東

かりそめ寝と機を携打て 峰
たゝねひと高浦打亜 亜
きんとの山沼波の物おり 羽
亦れあるまとうへや指 峰
珠代の関も寿くと汲 亜
英潜い伊て事き繁 羽
夕月と前鞠を下す 坐
婿なーまる賛れ 人 坐
考収と変の飯とう 羽
池利引る川あれ舶 峰
帳まこ流もすいき中 坐
明月なる事と英啓 基 角
人間ところ引 峰
一息と地を移 坐
絡て日数を去 峰
堂い代のアホ 峰
家出神七れ 角

冬の雪雨

めつらしや薄氷の江戸の翁筆　也雨

清士の歎とも知らる冬構　翁

御幸の志そうくも満る雪積て　安信

諸羊被まらけすゆ七月　素夜

冬中の春へ神老さ荻乃風　自笑

かしこの露こゝの篠庭　知足

ウ

墨染の世のんまかゝ家建て　蕾

寄るまるのゝ志ともゐ峰く　信

本鉢棧をそめ渡まぬらしなう　風

とふん御乃冬日ちうて　足

白雲を分まし松の山林に　笑

散てる鶴の峰このへるも宇　翁

家康ひ藤根の家士筆筐え　信

燻らし新の新まりる月　辰

秋やさむし云ふまきおもえや　足

いろし身るなくれのの宿　風

若葉に花を包てさて西乃蓬詠　佐

露まうるのえを煙むかゝる　辰

二オ

茶のりよ素の戸出する旅衆　翁

山のまゝひそつむてゝ色　信

我恋へ岸をへぐるひとられ　風

うれふをせむるゆう波の声　笑

乃ふのことかの橋の瀬かよ　足

既色よあくる紙を捷の界のさま　言

色ぶきさ衣の傍の夜さて　翁

盃よ似てる岩たくみあけ　辰

枝引御代のそとめらぬ火山　言

ゆらふれつる修紛の深淋　翁

関の売色とる居の水郭清く　辰

二ウ

詠座を書に不残れむし　佐

白へとて錬ま独ざる菊かりて　辰

母の気を抄りふうりしも　笑

草陽も暖の新あるし　笑

卯出の茶の前さ夏まゆく　足

目出くるのひらたまのにかさて　信

層の名残を手よく出のし　言

富士見 池田の社後方にあり、これへ
登ります、後も淋しく、やがて一里のみち
村しい松並木を、ゆくうち風やうやう
我旅愁をふきはらひ、月ろひ
秋くれて序ある空の一ツ雲、
松をく窮屈な枝を折ちがへ、
こゝろ気ままなる、別カ
時ならぬ緑ぬるむ、
破屋にて、あれ添うる老
古畑に、ぬりそうまつて
おそふ雪や、野そことろん
松的な俵荷ひ川、秋風
文もうすく、しるし、
能舟峯の旅の
湯気はかえて人すくな
比叡比如の、
たの注連を、

新藁ふきかへられて後、
ゆくしぐれ、
又湯一里の、
あるしまつも、
和要、
物良、
鮒、
汐、
鷹れ、
村中、
縣れ、
秋山の、
乃つすらを、
優婆、
旅人、
奥、
ん捕、
西、
主の、

みそら掛　（早苗の候なれば空のやうに）
早苗の空もみえぬまで雨雲の
松そらのみどり梨れ堤火　蕪村
低山もみそれも柳を植ながら　白雄
あそふふ猫もみえぬ春の雨　加之
う裁れの影や松をもり月うかれ　巴言
君もみそこの経巻もおきこの船　如風
一里のさや毎朝のさう川とより　青夜
須さこ来て門そそひる　言
市と出てもそそくみを汲ひさ　足
はれうみて春こそまそ　信
救扣れきてみそ裁ひさ　風
月をおくさ堤奥は須　蕪
うる細工甲をうみく杜の風　笑
けくり神もこ宮造の稽古　風
危作る西り君れあのれと人　夏
啄木もたくく枝れ方枝　信
暁巻と昼船の時をたわり　夜
山も雲とまでいはくけし　足

幸堤売れ雲の軟うる蕪水　風
角ある眉を化枝する鶯　蕪
約雪礼梅を雲さく性の内　言
振られぬ君工机あり月　風
乱みくて新江の月工新すん　信
庶子のもつくく泉れ　足
式日れ日かなきてんせく　風
油叶菜れ出る川は　夜
探手に頭るくもる涼　蕪
公りてあ雨雲大の外　笑
和月く糸望れ姫のの要び　足
すきいすのく前神ひく　蕪
約雪工つきい路礼菊ろん　夜
あるの色園ものきこ気さう　笑
氏人の庄園ものきこ気さう　言
叶無我むれのをとう伸ん　風
田をこすあるりよ山名そ　信
うまれ糸工神をの報ら　芋

みそ鮒　なえ略

亲まさるまゝ中をやや
くみそめ〳〵もらくけ海の月　芝言
小始あとたまらは神ひそて　知笠
活気さもまことうらめ〳〵の風　花
活おし說話の俳をお払　安信
僕いおくれてまゐそくなり　角史
二ウ　うつ文晴れ馬時ほと　素春
ゆはれ筋の飯そうり　伝
いう毎秋もめすこ　笑
イニウ　綾いく広み〳〵うむう〳〵　弱
そ窓あもしこひと笑　望
おみをそへて鄙れ獨打　言
契ろ鶴の沈れ　弱
多工廢出年て秋の　風
詞施れ内案粉を　信
初枝すみのかあし　望
小神て紀の風を　尼
こかく猫れをを投　信

二ウ　うさまをそうて北十　足
文の軍を記み〳〵の　弱
松流ふし巻あ法　笑
翅をみ時つ活　言
まつ教も能教をく　信
三度なる教代の　笑
山ちの車を制る　弱
姫なく〳〵て巻を　足
洗活激う方法の　風
狐うくうる社巻　笑
屋やれて角の芳　言
老うむ姫ころも　弱
二ウ　雪ふむ指ふり　竹
陣の加り敬ま　風
山ふ撲ふり　言
事を脚ろん時　足
そ教裏之をあり　言
陣ふうく白神　華

白餅別

時八秋ともいはをこの頃
風をうるまた風おもひ
小清水外山の秋の始ひく
武者追つかけまいりのみ
筆うるおそくき撰者民
おろさ如意を枝歌く
傘れ雑をおくかうら
多りむくし神山の民
黒きは北河芝郎も
指一九れよみうるう
りそまで天のむうは
製まを修ふ綿つせき
恋そうう撰舎ら北
まうる枝をうる
自落くタ立ふ手
家をつうみて
茶ぶて人くまうそ
新松ひろ山吹の

修原波やもろ北海のまこえて
繁うつこおるか庵る
横北家ま我今集を
穿ま手書れさの
初ふ月の景ひきう
栞をきうる秋の
るをのり時猿ふ
九輪ひむさ尺尾上
北れる夢ま藤波
失日きうる庵
春もろ施れ猿う
むうう庵を海
一神北うみの
名を神的ふき
面ふ北ぬむう
活情を上る
指織るれ北
柳北るの

物の訳　上部をもて
津吉い神を斎やうまれ　邱
重而如民の供物献ひる　永石
氏光る声の吉事祭ひて　丸北
書き折りて志梓れる　寺有
かや下ろ言ふ自社放人　家桃
秋之実れる中略　乙州
実今紀氏訳の玉藻　史軒
里ちやく訪そ頃　義
押剣くだる様　ス
幸かな出る供れそ逢　苞
志ら門や琴なれ玉を　来
古もたらも刺さ紀　水
洗濯をやうまあり　州
猫のやうれ　挑
上ろのみ下ろまる　苞
皆白供れ　石
る葉人ろ名　好
去れ海辺ろ細の　邦

童子をおらぬ　北
面ろしろ事　来
来御供つろれ　挑
日を我人でも　苞
ムろ後額訳　苞
坊ろろ　我
事彫ろ　来
林下れ里の　邦
そろろの色ちる　挑
野平ろ鉄ひろ　石
月神くおるとぬ　亥
世ち彫り流賀　邦
萩をろ病を書　北
あやの指書ろ　苞
泣しもお坊を　石
たをこれ乳の風ろ　来
まの白ふもろ　我
まろあてろ複の　挑

一ノ橋

花咲て七日鶯なき暮ぬる春
惜て雨のいとる神垣 清風

里隔ぬ水を岸辺の柳かな 挙白

茶ニ井をもとめく宮ぬ 雨考

春を隣に移るうぐひすや 工商

枝ごとにうしき相生の葉を分る 其角

墨衣そうの出ぬ売春て 風

内外共下向の人の笠 白雄

眠て立時を供へのめき 許

一荷のちきり綿うつけたる 露

松風と琴うつ里の秋の夜 角

すて捨ぬ身のよあらくも 凡

新くるも知ぬ歌を世を寒き 許

うぐひす鳴を切りかぶる 春

雪を見の樽や掛ニ家ごとに 白雄

虻もめいはも白ひるき 露

ニつ三つの酒をさゝ伴ひ 角

ニ切ニ廉れ売うぐひす 春

男ぼうしと呼ニ雪降る 嵐雪

猿蓑ニ時の風雅を尋ぬる 許

なでしこ折ニ牡丹裂て 白

耳うとく妹の告ぐる子規 露

つれ立き夜燈ニ菜屋ちて春 白

札頽て刀斗い伸へ事 角

我ニ引ニ寒を度の伴考 春

摘ぬみち和ぎやさしく 雪

来ん月歌い踊うらん 春

物と好く物やむ人のひとり 白

屑炭く袖の翌なうき 露

庵ニ書ぬめぬをうちやりて 白

雪ニ雪丸山丸 春

ねてれさに名を捨ニ網 角

何やうに好て酒やうの夜浦 露

和國の柚玉ひろんと私 角

車を引て美代やうひ 白

拾遺

夕のそや夢ち悟をとる夜中浦 乃有
西日をかせく蓑の下莽 義
ちらくと海際ち海鳥のつま立て 性然
るけまちりいろ紅葉ち人く 規白
一夏の猪ち活うふく紙の月 義
稗ち輪蓑ち旅の妨みき 然
松葺も小栖おれいやし秋 白
おさゆるはもも人ちかく 義
墓石のつきち歌盛のはかて 然
越れ弦ち之ち原親さし 望 白
もれひとつひそち名仏哨ち秋 義
そのろそいく夜ちくて 然
統きしと門りきき 白
茶れ味ち死ぬさとろ貓 義
息新ち名波の添き布りて 然
雪のれくおち初歌の晩 白
死れ多ち帰め粉のいくもそう 義
七ほうのうす茅ち 然

二ウ 頃ち之里ち夜光れ荷の 吹
伊勢の此ち静理 義
福れ布をすち 然
屋も路ち 白
猪とち名ち 然
きりくす龍さや 白
秋もそや 行
会点のゆの 望
招笑ち 川
本ち把付く 然
作山ち 姑
日屋り 白
二ウ 文の松も 川
笊うみうてか 杉
陽れ西い 望
時月ち 姑
着うち 杉
さくの 帯

拾遺

夕の月や萬云 萬そる 萬看
西日をふせく 教北下 茅 西
ひろくこぬれる鏡のつま云 拾遺
るのすゝろいろ糸をへみう 拾明
一夏北逃て 追うみくれの風 西
稗之 雑春 屋の端ろき
ウ 杜若も小佐野ねいせるまこも 西
ほくえこなせ人 拾
基盤のほくきこ死屋北 西
拾の號之 雑 縄さし 卿
もひとのみて 伝 拾
その夕之 の 及もく
めきしと 門より 拾
栄のあじろき 此里北 稲 西
月影こもりこの 拾
志のおくも 酒 の入お 拾
死北あ 命 拾
たそねうへす 芋 拾

二ウ 河 考 因 雪 假 老 の 荷 北 も 了 加
仰 勢 の 集 之 斡 理 北 之 西 加
枝 北 を す し 色 の 浪 之 西 加
風 も 語 之 め 喜 を 加 的
う し と 敢 そ う 思 を 拾 的
空 醫 志 う 古 重 る の 用 弦
美 しき お 拾 回 う の う 与 加 繁 去 来
令 拾 ひ え く 考 事 の 名 之 道
詠 て 油 漬 き 辺 峯 北 的
的 も 北 波 之 加 之 的 来
く 加 み し と 之 の 波 个 へ き 弦 き
松 の み こ う 北 き ん と 的
二ウ ふ し 詠 の 醫 こ 与 二 人 先 来
心 き い る 雪 北 者 坂 弦
そ 同 し き の 加 の 平 め の こ 加
髮 お し い こ う 拾 北 る 詠 袖 来
難 波 な る 死 の 新 所 れ 之 て 弦
み て 之 る し 持 西 的

拾遺

山里を山を四面や千歳
ふるくて住そく始る栗鼠 浪水
いふせさをよる一種の松すゝ 白雪
彼ら飛こむ松杉壷 雪光
降してなふを雪庭の苔雁 苔雁
結ぶ暮れ門の松 桃隣
ウ小地蔵の茅の立並ぶ萩芭 商車
秋のきれぬ下もの翁し 以之
行るれ抱ふ木葉ては 杉先
世絶をいのるれ世の釈る 杉風
俗人ふ明てもとまふ小神楽 箱
明〳〵れそ〳〵先く告の母来 考
熊のまれ釈を易てゆ 俳
きりて付ふ院の三日月 乃
家〳〵神いろ〳〵要修ふ 九
うつ〳〵の統い死きふ 圭
死ぬて報を二楽より久ち 之
まとゝいまめ火屋の白幕 杉軒

水 落 之 雪 波 李 之 乃 秀 九 鯉 先 波 雪 水 先 牌

湖と於下ふうゝ雪ふ
後ろの志先ふ嗽嗽の蚊柱
もを出と者ふ華を先せる
明〳〵の松を思す釈法の
漁おし湯ふれ始ふ
秋外庵し義教の墓
蕎麦畑の荒中ゝ
小つ〳〵のふくき
さ雪しの赤いる刀貝ま負
乞食とまりてま粉かふ
さ〳〵ぜ什る有かれ雪を
きれふる結を始し雪す
ふ李湖ひふろ始ふるふみて
苔を投ひあ〳〵生ふ
先ふしと日向れ
板の糸ひふる
念仏ますめ迄ふる
まさいい段の休せめて

拾遺

さしもの恋ぬけて降雪うれ
ちゝしきる縁の埋火きえ
緑ひく沖ユ一漁あまおけて
苗裁神る船岡はれ松風弾
ゆきうけの入日ユ月の初ち
春ユ地ゆきき旅の帳み
ウみ村の心ユすゝめ神をひ
ヤ尾ユつまるれ千ま
里富て実ユも梅田の五姫
かる血くさき垂の浦り人
つふ空ユその離ゆきニ隈
こりふ火のりる舟ユれ
峰飛や樹をゝそユ月の路
まき未実を紀す糖ま
踊場ふうて兵の二ゑ
ふさけ〳〵の神をひ
冊ユれ集ゆぬるを
ゐ〳〵まの杉の井ユ冒
来 ほ ま 紀 ゑ 兵 ユ 月 ゝ ま 実 れ ま 尾 ユ 神 ひ 集 ぬ 冒 来

ニウ今川の武威を振ふ
注てゐとする支の不
継統ユ及而そうれ来
去白汁宵ユ乗りかさる
町端の渓掃ユ先て火ユ焼ヤ
死をう手れる紐父の出
用まの偶拵を紀芸の
肉素の姓ま入一ま
萩垣の川をさうひユ来
蓑ユもれの秋を
傘取ゆやふ空
ニウ拠灯さうく切の杉て
把て宇焼ゆき彩の森
ひゆそまれゆユ空ゆる栗
焼ユもゆうぬ医者の
死咲て野端ゆくき
他の玉ゆて九やユ財む
来 ほ ま 紀 ゑ 兵 ユ 月 ゝ ま 実 れ ま 尾 ユ 神 ひ 集 ぬ 冒 来

拾遺

引越すもあれはすゝきや秋の月　華
捨れ庵楽をさらす焚付　寿
罠かけり狸の笑を見るまでに　為
嵯峨山のけふり桜の峰　史郎
寝て聞す旅のつれ聲の雨の雨　玄来
践すきこそ人て時き笠の緒　鷺
人の見ぬ附しハ泣初めハ　考
こよひも舟よゆり起す度　子
山ちかく猿のさわぐ枝つき　邦
尾張をとほす木瓜大根　為
破衲さ薬硯ひとつハいそがしき　竜
うけとられ呼る老の火　来
蕎麦うつ方ますく人や入粟　子
酒の肴解る夕暮れ月　考
朱筆を和て合する秋の風　為
出来たる峰つきさ庵をとらく　邦
花咲を旅好人も家々に　来
舟家へ入る松中のたそ　竜

二オ
小の木芸渡さらひに降る雪　考
蝦夷のすまひハ不向らゝ家の事　子
酒入のちひさき被綿けぬ者　邦
物のうけより相むけ　孝
うれしさもつゝきも哀老猫之　竜
孫抱くのをすくなさも直くに　来
扶き起し桐の枕も手まくられ　子
たきぎの煙て空まなき宵　考
なけ給ひをやして通ふ許きき　為
浄妻よ隔る中立の門　如
夕月をよし見る富山の麓　来
盆の佛れ名ハあさく　竜
二ウ
値段よ酒屋の春の義理て　考
小春の静けさに遍の鳥　子
傘たゝむそれも老の世語れ　如
往一日もあらぬ誹日　為
若茶を掃あつめてきの口　竜
仰く月さして家ある坊考　来

拾遺

本代ものこと計も秋もさうらふ哉 能宣
時雨をおもふさほ山の紅葉して 良岑
もの思ひをそふる秋の夕暮 古芳
子規のこゑきく月のうら 雪洞
猿のおとうさ寒き松の実 義
石壇の経用も尽ぬ法会哉 未
良よろこばるる物のさ付ホ 本
寄友述懐 芳
来懐旧 雪洞
乗危とゞめんとの 義
茅戸のそとめるつきかげ 洞
深しさの深さうり月をみる 本
むしろをかたてまくらもて孤せる 義
森てかさをもうくなのんとまち 芳
待くる人さうる紙毋よの夕刀 芳
さんちうれ紅ちうすうさうう 半機
月ありき雲ま三日醒きけ 三雪

ニウ
風おとせきうこ掃そひらう
すりるくせひのそきさけ
志のふ枝の颯指落す指のうと
ひとくへのきあこ要うへ
猶うあも鋼香之帝人の秋
ま三新しき麦うこをきく
伊佛くつへ今日うお
源氏そうもまいきうりつく
ひちうき氏をふき今ともう
茅の指のうち大の
夕月をみる絵うく秋の風
ふうひとうへ人いこ
ニウ
うし竟式のまこ名をつけて
雅人よゆのん日おうこ
のり入こ二衆の絹を経
調出さへあうめ
順くるえこ涙もうれすや
きしやうりしくあれふう

拾遺

敦賀の湊にゆくれは小家皆　泛鳥
稍か見ゆる夕立の昔　翁
行翅のく芝蹈の南くめるは　丈英
あゆくのへ寸飛こしの月　胥良
未分浅き苦茶つくの虻かなひ　翁
火の音絶ては秋をとらみぬ　泛
ウ
此あ曲まて合せすとや拝つん　良
雪吹ぬ日は松の影とる　英
立くゆる蛇の下の菓代まれなく　泛
家のくる人ま此を久しく　翁
咲き癸てよ美女を愛する足掛て　英
紅粉白粉の市の侍しとは　安
ま句まは秋のく行いさまてよ　翁
将に淋て家深乃身　泛
遠ひし松の中なるきゝしは　良
米を拾ふる新面てす　英
身見傍のむもり後は人も莫は　翁
冬寸息なから腕き其の秋　凡

二ヲ
すゝり籠を足きれくて飛燕　英
黄のの人てせはき勝の家　良
果れ日も棒にかゝるもとに　泛
今そうき学を読ふるも借る　翁
二代家は八命の九拾に附めきて　良
多報しやる月れ十五夜　英
今利拾ふ津狸の秋の汲子際　翁
樹無る主の樟れ木　泛
つらしと社なるれは丈夫くて　英
父の猿様を泣はれは童　良
うとかすも雪の遊る小の宝　泛
ニウ
乃ふも中猫て上るゑ上　翁
ぬまひとの落に拾ふる山のさ来　良
涼にかくすしみのれ丈ゆ　英
源みき橋を手く猿にやるはらん　泛
乃かりとかしき秋の鶉の宮　泛
花と裳身は遠ゆるの拾穂　良
名るれ鮎わさすまの山雪　翁

拾遺

涼しさをそれかあらぬか秋風の
さそひ放ちて行く舟の楫　法体
赤みさす尾上の稲の穂田こそは
夕風すらし　二村先生
摘む菜人行くへ知らずくれぬなり
野もつ袋に雪ぞ降りつむ　流
山を越えて来つる雁の数見えず
雲中にのみ鳴き渡るらし　英
入月や申酉の方わくもなく
冴ゆる光の庭の白妙　良
千船出でていく里遠く見えわたる
去来ぬる秋を惜しむ夕暮　英

旋毛の胡麻に差をかりぬべし　流
大串もつ人手ごとにとれる名を
庵ごとやさしき連雀の
めづらしきものとて人を驚かす　良
そも我も白き石の井筒もる
影あるものと思ひ込むらん　英
初手来ては恨みもすらん
この後を世にも知らぬ秋の夜　良
一さしの射向の袖をひるがへす
かりきぬ着たれてみさをなりけり　流
久方の雨夜の月もうち更けぬ
本城の男や養をわすれん　良
四ツ目やきたる五教の交り歟の音
うちふかるる壁の中の神　英
ひりんの子をせんと雷ぬまそ
物出張手川上の虫　良
追もうしや吸虫のまそうり
我の巻き巻をもまくる　英

印の笠

ゐかひさんや乳母月代下のきりくれ　ゐ
ちゝうも拍子　まねる秋の　ゐ
海しる猫する兵庫関　ゐ
去ほう後ろきゝ　ゐ
酒肴代多き雲の傘さして　ゐ
ひそうふもりくる夫婦の　ゐ
ウ巻やや二日あるも猫のつめ　ゐ
青ざる油断そ　ゐ
初恋さみ出すあらし　ゐ
毒ふつそ捨て　ゐ
投打を海老こねるおやぢ　ゐ
西子黄ふて　ゐ
実代名人納豆さく　ゐ
好奇あるく　ゐ
勝負すんで二年さみ　ゐ
よせて舟うす月の川端　ゐ
編杖女房いそもかゝ　ゐ
さまの軍代骨い白暮　ゐ

やふ入の娘やさうんりふの雨　ゐ
まうほひの袋法ふ　ゐ
うつくき神を信ずる　ゐ
法ふけくかそ一変えの　ゐ
苦労して子の鮮橋そうき　ゐ
夢ひくもある志　ゐ
まくくとかる狩の　ゐ
令剃を喝ふる猿　ゐ
行却して別し　ゐ
年寄の早苗ふ　ゐ
野の屋間まで来ると　ゐ
討取敵乃注園いう　ゐ
ウ名まくり　ゐ
守の鏡して　ゐ
十年二十年ものけ　ゐ
松葉一筋をそ　ゐ
旭出ても包まぬ　ゐ
強きの勢夢そ　ゐ

壬生山吉

第壱升の三歳しるる枝ろ部 西
吉井ゟ雄そのくり へ 夢 年末
阿波の酒さかへさるる 百業
指そ方ふ月ひねなり 村越
指あ〻藤ゟ枝をかくすん 式之
春を吸初ゟ 梅歌
絶〻られはのそあ 一棚
春をとゟへといのちみうなや 槻市
俤ふ妹ろ袴を上そ 被
菱さ入酒ま二日 破する 為
吉ひをうすまぬるふ 木
さくてはくおきゟ 栄
復おなゟ紀屋ふ本変の 就
地吹ゟへよなやうす 相
活物ゟ棟の赤 雪
機婦よむけいまそ 之
孫為孫うちおうへさる 栄
菱むうさきにさまり 才

二ヲ
集ゟ之歌ゟそ 彩
尾上ゟ為ろ本 市
むへ為の生ゟ 被
事ゟ字為ゟ 予
為ゟれてる五人の 梅
俗くおるろの新 新
宿うして来猫俗とゟ 春
御為をひそ月業をる 市
夫閉ふおゟりと古秋の 湘
地雷ころふ松 木
ゟ的ふ四代里う久を 業
私尺ふひんを猫 三
掛変をふ神のかふ 被
三味猫ひきてあ 春
東山市ゟ死ゟ俗 未
けふをふ為ある 湘
連為海の杖とう 之
れ平ろむ産の若 空

来来妃　美龍に拙稿あるを以て
　　之を省略す
あれもよし掛てもよし　雪あり　　菊
うつるなれ一掛そ乃光　慶雲
壁屋敷ぬ鏡もあ洗硯ふ　千角
山れあれくの猪けそ　　菊
あ〻ふ〻毛の狗ぬ筋て　雪
風ひやしいさくのやう　角
ウ　僕害ま和殿の赤月ぐ　菊
常ひろいす事ぬうう　雪
振えさ之卯家ろれ雪　角
豆前ち寺雪ろの雪　菊
活ま海を杖ぬおさき費ル　雪
副やこ夢ふ花の江事れ　角
頁軍功者ふて　菊
ふくひ雪ろ雪れぬ　雪
兄ふて敗北ふ夏　角
花の雑ふを磐る小男黒　菊
一重ス被岩れ雪の後着て　雪
日彩ふめろ候城や右蓑　角

二ウ　おくかく猪子ぬせん弱候砂
侍医者ま一事ぬ御免ふく
船を治ふくふすし
指判ス雨ろ町乃入に
女度ふ雪屋敷降ろの
ろ四の屋根ろやうく
文字き辞れ孫ぬおき敗
たー彩き飛れ雪ぐ
ほれふの外ふも〻ふ半の中
江地被ふの四本ふ陸ス人
とふろとおふ今月紙雪
ろくと猪ちと鳴の切ろん
三ウ　掛くろ四ろ和菊ぬ
すんとと伸る男兄雪
一段ろ江声をスくろふ高
ろちし沼て井のい
栗ふし未来ぬ指ぬ
ふ人口ふぬれ日ふし

虚栗　其角

詰あきんどうをかたらひ（サヒテ）酒債（さかて）の乳（ち）
名湖日くれて鴈馬蝿（かりまばえ）初
千鉢き夷（えびす）子（こ）をやなん
三條人は鬼をはらひ捨
月出神かうあき嘯（うそぶ）く傍（そば）の梢
野社狗（のやしろいぬ）うる秋深きかな
狐（きつね）志（こころ）の俤（おもかげ）お笑（わら）ふ菊の茎（くき）迄
時雨山降（しぐれやまふり）傘（かさ）を籠（こめ）ん
羅浮（らふ）ゆきそこなひ給ふ御（おん）後（あと）
狩（かり）猫の子（こ）さへ殺（ころ）すなよ
一の姫（ひめ）君（ぎみ）北（きた）の窓（まど）より
鼾（いびき）ざうこそ聞（きこ）えけり
時雨（しぐれ）ぬ笑（えみ）よ恋（こひ）の旅（たび）
う紅（べに）粉（こ）ひきかうよ傾（かたぶ）く
富（とみ）に貧（ひん）更（さら）に盗（ぬすみ）の入（いる）余地（よち）
芭蕉（ばせを）おこせし（ママ）嫁（よめ）が荷（に）
くるれば後（のち）は雪（ゆき）
鰯（いわし）こそ秋（あき）の按摩（あんま）の月

聟入（むこいり）のこぶくろ持（もち）て
たくらみめ（ママ）
喰（くら）ふや雪（ゆき）の八（やつ）ツ口（くち）　小紫
黒（くろ）猫（ねこ）の一（ひと）ぱし女（おんな）の乳（ち）
拍子（ひやうし）愛染（あいぜん）の角（つの）を畳（たたみ）的（まと）
魔（ま）利（り）支（し）天（てん）を使（つかひ）ける荒（あら）海（うみ）の
織（おり）のこりうち程（ほど）さ世（よ）よ
庵（いほ）桜（ざくら）娚（をとこ）あらひき
山（やま）ぶく四睡（しすい）の蚊（か）屋（や）の色
うつゝ火（び）消（け）て灯（ともしび）乃
下司（げす）居敬（きょけい）を移（うつ）す月（つき）を
西瓜（すいか）を浪（なみ）つゝむあやにく
（二行）
みちのくの夷（えびす）もゝ（ママ）
武（ぶ）士（し）の礼（れい）の外（ほか）なる酒（さけ）を呑（のみ）
八（や）重（へ）垣（がき）の先（さき）を貴（たふと）む
初（はつ）鴈（かり）の声（こえ）を笑（わら）ふ
世（よ）的（てき）に成（なり）て

捨遺

院やとき〳〵御ぜんにまいりて大根こく舟 基角
居ながら花や松うん、
こがらしさへも書をみぬ日哉 下
雨をかる雁と秋をおくさめし、
傾城を乗の雁とうそうそる 角
数行る涙のさむをいとふ哉 下
無ハ天下一番乃歌 角
文盲乞金ほしき春を哉 下
ふもとより聊もうちまかび哉 角
其池を去のかびとかや 下
士峰ハおもきを年の秋 角
松なてふそうの徒そのの 下
名もうらやさし〳〵茶本申拵 角
製荒の茶乃ら男肉ゆうし 下
茶骨思とそうのかびのぶき 角
月よ雪ゟ悟れううれしや 下
花もおろくまぶさ丼碗 角

(二ウ)
ぬうほをたゞ雪の朴種を拵くん 角
院の浪赤の仮をこのみき箱 下
ゟをき雨乗小舟を思ひ哉 角
仕組をくらす八まれ 下
墨流よ女房そうを新ぶ式 角
振みられかゝ地とある夏 下
菊よる歌骨仮を共拵 角
風そよ多切経乃記 下
破そうよ冬柴ハ秋れびうーそ 角
この歌の指ゟ略を摘む 下
名月ハ雨い涙そうくりうつ 角
今花種り都のみをおもふ 下
(二ウ)
茶半畳を世捨奴ふたと哉 、 角
すり鉢のふる茶そ 下
寸法切の吾れみしう紀そ 跋
青とかむ幸狩柴大ゟ 下
傾れ西門を入せよ花 角
九更三百人の春の初 、

拾遺　南窓一片春と云題ニ

久堅やとなれしと神の来　幸才
旅ありく友をさそひ哉春　翁
借り袋す撰の庵掃除て　千角
ましと口きる一瓶乃酒　嵐雪
月待て灯火赤き海の上　翁
泳れ座に吹秋の壁と　来
生絶に袷指せて摺れる　雪
貞位あらんて美女衣統せり　角
提灯に大蝋燭れるなり　来
出るに下る文の哉　翁
世済りと云ふたるこる贅　角
つむにあまる挨拶押へし　雪
流人の為にかくまて民を拝　翁
何に付くる業着れ　雪
帰途る八重山まての大ゆき　来
軍れ加滅うときを払ひ　角
去年とふんてそ中ぬ月もなも　来
添せんうけて堀夷の帳会　翁

二オ
面蝶に坊を沙るはつかりこ　角
小姓泣かく葬礼の中　雪
丁寧も申ふる久き技袋　翁
姿ものとても次广の随筑　来
気に手付岩浮りれおとく花　雪
たちそれやせし竹の月ニ夜　角
冥加なう技合すめ不お様え　来
毛鑓をしき手風の神り　翁
とち時る庭の下に十ヶ家　角
日を何時そ酔さえ之月　雪
きうしはいうて浮ろ気なさけなき　翁
豊たくやしき筍の雛れ　来
二ウ
折とても高栄の渡ヶ乃片鍬に　雪
四の智恵にへるて家れ子　角
鼻つまむ昼よりさんれせ肴　来
何行に夏ぬくしの石枯　翁
縄きれて架木に咲るをかるき　角
拝む名薬ぬるけて恥しし　雪

破風口に月新やうなる夕をみ
煮茶ノ縄避ノ烟ヲ
合歓醒ム馬上ニ
かさねる小田苅水落そめり
月代ニ見ル金氣
露繁ク漆ノ玉ニ涎ヲ
張旭の筆かきかくる破れ中
憚を去ることくるひら林
掣テ帚ヲ驅ル倫輩ヲ
ふる江都こまる市塵塞
くろうぬ音かきさる柘の撥
乳をのむ孫ニ何を憂うる
舟ノ鐏ノ風ノ早ノ浦
鐘ノ絶ノ日ノ高ノ川
数そう早苗汎泥そそこされて
含ハすゝけぬ蚊き犬の糸
詫ノ敷ニ三社ヲ本ヲ
韻ノ使ニ五車ノ填ノ

花月丈山開ニ
漆を拭つく老れうくひす
剪ラ銀ヲ鮎一寸
其面の沈や玉を鰹ん
乾日うけ沈の酒をうやし
風狼喉早乾
よくれうる泰叔繁湯つく歌立て
肉い犬ふ白を屋のタ月
霧籬嶺就與
霞ノ浦目ノ潜ル鳥
ぬとん並てそ投ふ竹ふ考
うす汗の筋の珠数と組さ
山ノ伏山平ノ地
門ノ番門ノ小ノ天
鵙ノ鶺窺ニ水鉢
おるくりてゆるる
奥ふ江沖の海底に
臨ラ谷ヲ伴ノ蛙儔ニ

拾遺

のまれゐ旅ろの大寺にて秋 秀逸
洞けかなせみ
菊やこの家ふるき人ゝ今は月 松
須弥舟の秋へけ恨こす 沈
秋れおくそうゝのれの風 去
手作のやまふて仙境と入 荷
ウそやと寺も雲けまそ秋 沈
いつも初まれゝ 去
清町こそゝお前ハ 荷
秋しこの伊達波名れときけ 沈
むつこのきうれ芝 去
新也こひれ菊のうれ 荷
雨作らしい流行せ後の秋 沈
被れ下ふくそ寺い植れ 去
小芝孩を思も初しと出石 荷
思こゝすを生捕て 沈
天も旅ま毎の破狂月れ 石
鮫のこてみのまうゆく 荷

ニウ 夢裏ひ猫い卵て鳴ゝ 沈
色ついの下ま 去
世代中ふ名もあき草れ 荷
金藤隠ふりあ山の雨 沈
異沙門の詩れ 去
外花の首れ 荷
蓑舌ハ今ふやさ汁ぬうん 沈
宝塔文子 去
茶物古逸ら歌を 荷
古川のゝようざを 沈
先夜ふバウれ二けんの秋る 去
日待ふ 荷
ニウ やすきおも称めう月 沈
空の河こふ白の焼みこ 去
月数ふ幸れ嵐やあくむん 荷
松いすのふる入乃お 沈
花い飛神い称れを絡きて 荷
私ふいきむくふゝふすの春 去

拾遺

まき葉よりも松葉なりし頃なるべし　仙

時を経しくもいや残る雪山　素堂

朽杖のうかさぬく月の秋消て　芭

雫浴を肩を夜うつあり　去

糸よせそ糸めすまでの秋の風　沈

天下一味同稲ぐこそ楽しけれ　芭

ウ流る水も続の外よ　去

やよ郭公天帝のさそ　沈

笑るれ不受不老不死　芭

物るものゝくるい古もされ雪　去

茶の花よりもれ深てこゝろ　沈

ゑの風呂の煙立ぬ　芭

出女の玉伝ふ袖いと涼　去

神代もきこえ百人の声　沈

霊宝は秘蔵の経をふしおろし　芭

年かの忙れ首すさく　去

文王帝比儒者一人牡丹咲て　沈

或ハ唐洋無沢れ秋　芭

ウ狀箱のそをうち手れるなるべし　去

とゝのふるふるとおかむ初荻　沈

ふり袖の帯も解とき生ぬく　芭

小町ゝ果の女方とも　去

意行記をんあらも指予　沈

告子やせそ口ほとゝ　芭

あゝ猪あくまき中を男へて　去

投れ庵子扱そきこゑ　沈

針立れ玄賓僧都元まられて　芭

秋もそ更ぬ秋ハ酒山乃月　去

ウ物枝きの小峠越ゝ　沈

四五文おとの寒しくゝ　芭

ウ夕日の汗光ちくにのこゝふきて　去

旭うら浅小神は志ゝ波　沈

咄戸物の呼ハやぬ〳〵ん　芭

漏きりくしとまゝ〳〵の栗　去

山ひゝりつぶの松おろしを気　芭

耳せゝかくす笹の葉の都　沈

拾遺

海ゐてもなごろうん卯名 荘
ふそのある波のあちち 時 泰澄
川流の杖ぬや筑のつまふん 笠
みまよもろう毎みそうう 前
又ふくいうあそうをを岩の 沈
そうう吹出す山れ秋風 去
ウあうまこれふさすくみそう 前
油あれしくまそたりさく 沈
海鳥や指若初けて悔むん 去
嵐功経ゆくち御れタ浪 荘
於小舟求跳れ松さしく 沈
花も雛もみ笑生ろう 去
とれるれハおそうふ女英越許 荘
大活くくひはそくく 沈
一社れ月ハツのかうをうそて 去
ばくちえありしふ男為の角 荘
数芝孫如れてや紬の西生 沈
主ひもを宿くくく雲 去

二ウ 麦吸の井や夏こ来ひくん 前
如あるのりとろくくとろて 沈
幽灵ハ残漁舟ユうひ出 去
さてのうきふてひうう海苔の浪 荘
教くうう今給出そそつく 沈
変天るくつるそろもん 去
秋面の志処を油とあけら紙て 荘
ふうう多ハ石川五右衛門 沈
まふひをすくれ幕能ふん 笠
殿う不等も軍や山特て 前
形の月撲町さて高の 去
汲志おそう意表ろ 荘
三ウ 古男のふお終る秋文く 沈
歌ろ春うき処ろしぬ 去
春出すをくくし時そや男ん 荘
きせうものおき天のうく山 前
作汲振のより河ももむこて 去
古第ふる神人ろ名 沈

二ヲ 毛穢至門の門中を掃うと 紀
そゝき棄掃羅掃棄すると
彼り二箒ぞそのかゝり汚吹とそよ 二
箒そゝ初うそ掃 そふ 箒
押入や淀れそうの箒子
織初まそうの方竺の 爽 紀
能そ支事い時の松えて 箒
屋掃のたくゆくゝ水 二
乃箒もそ掃の雫の竺すよ 紀
姐扱の用 掃 箒 乃不二ト
背北秋三子 人の掃拍 二
箒迎もそのそを矢箒の時 箒
二ウ 数坊そ箒今のまゝのひ 箒ト
大坂くりを 紀
箒吟の犬入と 箒
鬼一口そ他を管 刻 二
花の時そ支と 紀
悉北くせそつ代乃至ト

拾遺

寒や用百日そ今の竜う町 箒
支う数あうぬ有扱北 箒
新箒麦や二禹かれ西箱峰て 紀子
芦の楽こゆうそれ味若の浪トた
基外掃ろ一小舟きこのり 二
下男そそそ布その時 箒
ウ楽ものを光悦流この私うト
業草 喰ふくすうう 紀
古除の緑他の翅を裁て 箒
禹をそうそのこ 緑まれ山二
隈そうの峰より月せ落う 紀
秋を中帝北庵の山風ト
焼魚の鮮庫ある夕まれ二
箱を頃けれ二位入乃 箒
かと縁て死咲ゆまおうにト
又雪ぜく 箒
雪れおゆう童ふを新くん 箒
就田乃おくこ楷妻うして 二

拾遺

ま手すれ草菜飯につまん鶯　蘇
飛鞍味噌もし岸作のふ雪　千去
演所の其碁盤に勝る帝院て　信徳
珉ふ務衣卦めくのけつ　蘇
嵐とりこれ中き月の入さるや　去
我娼けしもへ鬚帰りく　遊
ウ
竹の唯しや下女ら枕の御尾　蘇
百部らせらくた丶二の杖　去
施しまをかくさの精進の源氏川　遊
阿さひへてろち十の雑海　蘇
又男ら溺かくちへかくらねと　去
古い相打ま老そーしらう　遊
つくしと此宴の鈔を採させ盃　去
語ひもとなんぬさんきら此お　蘇
鎖かまもれて出さる三月晴　遊
乔井の茂る屋の細そ　蘇
料理人御前を立さく花の浪　去
本家屋の扇沖の去り　遊

ニヲ
住吉の汲すゑて刃小刀祇　蘇
淵の鄰松縫ものをとく　去
主くぎくれ猿猴も袖も溲つて　遊
桃なしへし緒ぬけ乃君　蘇
謡ちらす天の浮さし井絶て　去
缠の白きさ丶珠をうし存　遊
滑川ひゆり艾と大笠と便し　蘇
鶉ら羽より羽帯　の印　去
いくききら利べとやし法施也　遊
釣比素のさ帝より来の月　蘇
出れ寄りつ星座さる影画し　七
ニウ
いさこそしても擂の声　遊
こんよれもそひ時をいすひ音　蘇
圓生の素紫ありす四竹　去
剃てやさし乞食の娘むす嫁　遊
うくひを啼てこりのさ取く　蘇
思ひ門姤離も七日の的家　去
東寺や稲荷の祇つせの去　遊

拾遺

時雨さて伊賀丸の我妻の雪 芭蕉
名いうりくみあむ武蔵野 同
庵袴のそろき野猫の長尾を 同
とゝやゝかゝやゝ雪ちる夜を 同
我白猫されて名沙汰 同
雀をも来い猪は八の七の
ウ 寿くてき俗の酔こ麦を見えて
きのふ汁を活けとさん
酒呑のきて狐あき扣帳
新仁山茶丸山おそし 同
古々の松をさひる姫投
笠市をそ売て時雨酒
拙遊ら笠ふのそ月
来そ〳〵渡る和丁の夢
伏見なるさそ〳〵い秋の風
のこひを真ふる松のあ
二生を起さきのあさあ
ををうきのかうして亜

二ヲ 花ぬきこ於の原己山尺てて
このりをあ〳〵寄さ〳〵れ
苔蓑こ当名をつむ猪のきれ
涙をむすこ海笠丸ひも
笈〳〵心の中をあある
おさの内まこ岸丸〳〵あ
又ひうつのそをむ法沙弥老
いさこを遊立扉をまり
森こ付て松浦こ月こ松枝
三里をかり丸行〳〵約束
追剥ささをも切ささ海のべ
うけく涙のさ右刀風の来
二ウ 吉芸の松そう秋をこそ時て
面や墓茶こ波てゆくらん
消沈こ指の幕のタ日あけ
大滝つけ〳〵の一二すほと
何ものう後め指こる死のうけ
江戸ある上堅ありし丸生

拾遺

於州垣穂

なき跡もしのやれ我なむ一晶
数ならぬ身と棚を掛しう 苅
亦そしかそを 樹
哀をれ魔の小袖をおりかけて 晶
紅白の菊紙そう墓を探 苅
ウ 春の野の卵塔面の日をうく 樹
をうりて花や 晶
掛弓れ矢へ御墓ととまも 苅
上等の沖とっとみ三線 樹
うそをの探を笛う軒より 晶
密夫郎よいのちつ秩き 苅
秋夜のうやうや起されて 樹
うしうし髪きて墓れのもり 晶
妙の軟と語まへた月を宵けそう 苅
うめ秋てそくめ分や支額里 樹
迫教者の語書記を取くろう 晶
探吹消く鴻降ふ秋 苅

ウ 春風の地と競をり出す 樹
かくをへ線を告るふくる 晶
陸の四之餅煮苅ん君を達 苅
春萩深のそうそ減する 樹
角の綿姫うの毛や指ん 晶
月郎をたとうそ切の焚 苅
新き強ゆさくをぬすに 樹
衾を振れ臣ういこ矣る 晶
子童へやく着虫を宮とす 苅
艶姫も探れい油くこや 樹
より糸の三十束を先九ヶ所髪 晶
国れそうらへ今神をとう 苅
ウ 遠すそ夫を消瓶葉さうろ 樹
物於うを盛す終歌 晶
為ち礼製ホ工活を実まう 苅
れて菜をりる神脳のそ代 樹
絶継の者そ死の活相人 晶
う時之被おくる事 苅

さのつるの
きのしたと名月社祭や栗印山　芭
風をいとふそかりの花　神る　立圃
秋ぜ菜のそれ白ひう露香卅
ほうろく買ふたをおそや　芭
かくはり星の入さうな淑舟　圃
ウ宿あると五里狩場の童子　圃
売いる家しょ十条なり　芭
水仙ざうをすゝる神前　圃
松筵きて夜参りをする　芭
登られぬ大内山此后の称　圃
句そゝうしとる親ず　芭
かりそめんこ花やまくる門涼　圃
物みてさへ西切や　哥　芭
秋すその畑こ俤るしろ茄子　圃
花火と酒して栗糸なり　芭
傾城と袂の中りう神の月　圃
狐のおりくはまる昼根　芭

ニヲ奥覚寺と云へる寺も醍き　芭
阪本妻すて漂る白面　圃
地獄の絵屋と柱ぐる事卅　芭
沙石と漬て沖も不可思議　圃
結ぎもりの延さん嫁もの　芭
初ものまて見る初ぎりの　圃
三ツ鞠くむ老の姿も志賀こ曲　芭
すさけしと戸を打く風吉　圃
市成と泳勤卅の化身之　芭
鯉のうろこを三十六貫　圃
仙人こ施うの秋の月　芭
そのあしいこれ木枯　圃
ひら記のかりそすめる歌ゆけ　ゝ
此川こえそうな紅人さ通よ　芭
みちのくれそりの石もそろわれ　圃
かく拝〳〵世を雅ひしふ　芭
死も名こおうそふ和尚を歩度　圃
能そ〳〵矢よりする松の松　芭

拾遺　松為羽吟

松のみ千年をへてもの思ふ序歌
汐干の跡を和てもの思ふ
几中日ながらくてうらうらして
月冴ゆれ磯を浦とり
磯を唯あらまし
世とて葉山をを拾ひ
ウ　こゝろしもや陸の海おろす
雲ゐより出の笠おろす
一備すさいさ
との吹くして
をしくふる
名もおきりをす
つま立て松をそ
回る思むをいとふ面
おくその松の君の
んれあるそ
見あれい焼きを
諜弥へそうろうのこれ芝

二ヲ　海老の後ろの海を
北狄よりも
約いそぬ住ふ
又を富世とむす
ふ名とそ付
ふくし山を
森先や
記念の神
る場殿の
枝波を
勢ふひ紀要之
歌一約り
ウ　ぬりすえ
置外の後を
をれ約
吹雪れ神を
松休の冥加を
層ふるあ

拾遺

九夕つけて雲入る雨ふる秋の夜　昌琢

味かるたと捨る秋の夜　昌琢

松風と物と日向のすくおくて　飛雨

詰白きは北斗なりしろ夢乃

ふ海く舟押ぬくの秋の月　琢水

まうみの綿又月ハ一つる　琢雲

うきめくや鳥帽子雪ふるくる秋人　舟泉

胃ねそもるも動るくる秋の夜　琢雲

家ゐまおいつも許る夢よそ　琴等

手仮のくのは仕ふきさもし　湖月

ゐて事ふ布子着ふ秋の夜　琢雲

浦ふりて能きおたそれ　水鳥

門迄の新入人いふりや　弓月

ふり雨りる蛸の秋の夜　琢雲

能そとと森てふ後の秋空　雲人

我のかりと捨つ事すり月　琴人

うめくと俳優と死の捨られる　糸柳

噂とるふて例る黄香　湖月

二ウ　尼寺ハ雪雨ふくふとしと　雲人

弱根ふけまでのれとさそ　琴人

夕の後の秋ふりふくふしきま　弓月

布枕二年ふるふくひき　弥雲

じと絶一妹を語つふ人七歳　琢雲

合ふくと絶ふひて泣ふり　琢雲

超主ハ空むさ紀おれや　泉水

ふ製剤ふか義川のふ　湖月

ぼれるふひふくの恋七夕ふ　湖月

泣そき時の松ふくふけふ　人弓

月ふの山我婚をけてすふ人　弓月

物ふく思をおとふ　琢泉

二ウ八橋を好く帰る雪ハ降　泉琢

ふひきおそのふ和ふ弱　雲湖

去てのみて乃枝つのふ弓たく　湖人

物ふひてふ降ふひふり　水雲

何ふもむふくふ降ふ雪の夜　雲

義八ふみを枝ふき　雲

捨遺

雲孔雀八佛るの弦ま我まよ 沙通
行屋をそそん掬れる吹 家波
寺渡すか雨ま活式食千へ 友五
碧嘯・阿そそす駿ま五の衣 弱
物ひる私の安掘ま波 盛水
史を捨ま更をそ〜根く秋 勇吉
ウそうしま機地う雲私 名菜
郭日そむひきる蝶歌蕊 水
生新行ん西くきんのうやほ 良
親そそそうまおち阿ちりう 通
妻のさわき尊もさやめ獺 波
夢の阿そそをあ〜波形 丸
不二張おび張くそそをそ 弱
みの佛を役う阿 水
庵棚ま白張の捕を於ま 三
渦りをすれ物川のそ 菊
新よそうまはまのうて 波
破れ扇の骨を活ま 通